

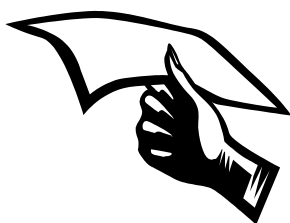
大学授業の型



久松佳彰

大学授業の型

久松佳彰 著



電子新書 1

はじめに

「大学授業の型」ってどういう本でしょう。もし貴方が大学教員で、あなたのあの授業が、大学の学部・学科の匿名授業評価において、その学部・学科の平均点より低い点をつけてしまったら使えるかもしれない本です。この本に書いてあることと自分の授業を検討して、改善することができません。そういうときに参考に使ってもらいたいという本です。逆に貴方の授業の全てが平均点を上回っているとしても、この本を下敷きにして、さらにご自分の授業を改善することができるとは思えないという本です。

私は、良い授業は何百種類もあると思っています。しかし、良い授業には属人的な要素があるので、改善する方法はあまり多くはないと思っています。この本には、私が実践した改善方法、それも実行しうる細かい改善方法を書いてみました。大学での教育を非常勤講師で5年間、その後、本務校での常勤で7年間おこなったので、実際にやってみた改善方法をまとめみたというのがこの本です。

私は文系の教員なので、どうしても文系向きの本だと思います。いわゆる理系で

おこなうような実験のやり方などは知らないもので、全く書いてありません。大講義、一年春学期の基礎ゼミナール、専門ゼミナール、就職活動の支援、卒業論文指導についての留意点を書いてみました。これが一つの「大学授業の型」です。「形」ではなく「型」という言葉を採用した理由は、「型にはまる（はめる）」という時に「型」を使うからです。教育をある「型」にはめてみようというのがここでの問題意識です。

読み方は最初から最後まで読まれることを想定して書いてありますが、もちろん、好きな所をつまみ読みしていただいても結構です。

目次

はじめに

序章 1

一章 百人以上の講義科目 10

1 授業を開始する 10

2 授業時間を守る 14

3 授業ルール 17

4 中間試験 24

5 期末試験 29

二章 百人以下の講義科目 32

1 時間割設定を工夫する 32

2 英語で授業をすることになったら 33

3 自分の講義がクリティカル・シンキングに対応しているかを検討する 35

三章 一年生春学期の基礎ゼミナール 38

1	ゴールデン・ウィーク前になすべきこと	42
2	ゴールデン・ウィーク後の基礎ゼミ本番	46
3	最終成果	52
四章 卒業までの専門ゼミナール 55		
1	選考プロセス	59
2	ゼミ開始にあたって	63
3	コメント・ペーパー	69
4	サブゼミⅡ教える活動	73
5	インターゼミ	75
6	3年夏合宿	77
7	3年秋学期	79
五章 就職活動に対する指導 82		
1	キャリアのホップ・ステップ・ジャンプ仮説	85
2	就活三種の神器	88
3	プロフェッショナルとアマチュア	91

4	就職活動支援のスケジュール	93
第六章	卒業論文	100
2	構成	102
3	発表、そして卒業	104
第七章	オムニバス講義・模擬講義	106
	参考文献	108
	おわりに	

序章

日本の大学の授業の基本形態は「聞く授業」と言われています。教育社会学を専門とするオックスフォード大学教授の荻谷剛彦氏（前職は東京大学教授）は、『あえて言えば、「読まずに聞く」が、講義形式を基調とした日本の大学教育の特徴である。アメリカの大学とも異なり、リーディング・アサインメントのない聞き取り中心の授業である。だから、「おもしろい授業」とは、その場でおもしろい話の聞ける講義の謂となる。』と述べています（『書斎の窓』2011年4月号）。

大学の今を考える時に、大学の歴史的な変遷を考えるとところから始める立場もありますが、現在までサービス産業化したという知見を得るところで止まっている、「なぜ日本の大学は「聞く授業」中心のままなのか」という重要な問題に真面目から向き合っていないようです。吉見（2011）は、1990年代以降、大学生になるハードルが低くなったことで、大学でそもそも真剣に学ぶ気などない学生が増えていき、大学が「学問」とは無縁のテーマパークとなったのだと解説しています。（私の印象では、1980年代後半にはもうすでにそういう雰囲気

があつたように思います。そして、1990年代以降の日本の大学は、このような変化を大学のレジャーランド化と言つて嘆きながらも、その根底にある市場原理を否応なしに受け入れていったとされています。そして、日本の大学に浸透するのはサービス産業の論理であり、大学教員は「お客様」たる学生を大学に勧誘し、教育サービスを提供する労働者になつたと述べています。この著作に欠けているのは、なぜ日本の大学は「聞く授業の提供」から抜けださなかつたのかというまさに歴史的な疑問でしょう。大学が自分たちの業態を変えないまま、サービス産業に参加したときに太刀打ちしなくなつたとすれば、当たり前です。とすれば、労働者（＝大学教員）にとって大事なものは、教育サービスを提供する方法でしょう。本書で焦点を当てているのはそういう型です。

昨今の文部科学省が提唱する「学士力」、そして経済産業省が提唱する「社会人基礎力」が想定するように、「聞く授業」から「参加する授業」への転換が促され、そして、成功事例も多く取り上げられています。例えば、経済産業省編『社会人基礎力 育成の手引き』（政策・調査／発行河合塾、朝日新聞出版、2010年）には数多くの事例が載っていますので参考になるかもしれせん。

本書では、「聞く授業」をやや高度化して「ちゃんと聞かれる授業」にする試みと、学生が自ら参加する場を自ら授業外に設けていくような「小人数ゼミナール」の仕方を書きました。いわば、従来型の「聞く授業」と、先進的な「参加する授業」の間に割り込むような試みです。「聞く授業」をするのは飽きたが、いまずぐ「参加する授業」に移りにくいと思っっている大学教員もしくはその候補者を読者と考えています。

それでは、あらためて日本の大学での講義の対象と基本構造を確認しておきましょう。まず、講義の対象ですが、いま申し上げたように、日本の大学では「聞く授業」が基本形態になっていますし、学生も「聞く授業」をデフォルトとして想定しています。最近はこの二つの特徴が明確になっています。第一の特徴は、学生の真面目さです。授業の出席率は高くなっていますし、自分が出席する甲斐のある授業を「受け身」的に求めています。つまり、「聞き甲斐」のある授業を求めています。そういう中で、必ずしも全員ではありませんが、参加型の授業を求めている学生もそれなりにはいます。だからといって、自分から働きかけることは少ないというのが現状です。このことは、教員にとって、学生が真面目に聞いてい

るように思えるのに理解度が上がらない、もしくは授業評価が上がらないという可能性を招きます。

もう一つの特徴は、学生の繋がり方です。この特徴を考える上で、原田曜平『近頃の若者はなぜダメなのか』（光文社新書 2010）が参考になります。当世の学生は携帯電話やスマートフォンを媒体として小さな横のコミュニティを形成し、十年前、二十年前と比べても、世代の中の横関係の重みが、世代を超える縦関係の重みに比べて大きくなりました。ここに成立した横のコミュニティは基本的には「同期・同学年・同じ歳」を基調としています。つまり、実社会と比べると学生には多様性、異なる視点の受容が課題になっています。彼らは、自分たちの繊細な横関係の付き合いの経験から、自分たちには協調性がある、すなわちチーム活動ができると思っていますが、年の離れた中高年からすると、より異質な人々が集まった集団の中のチーム行動能力に不安を持たれています。この点は、「社会人の一人としての教員」が、社会が喜んで受け入れるような「人材」を育てるためには留意しなければなりません。

次に、講義の基本構造を確認しましょう。講義は基本として一人でおこなうも

のます。大講義においては、この他に、大講義＋T A演習という組み合わせが一つの選択肢のほずなのですが、あまり行われません。大講義で「Q & Aがある授業」を行いながら、それを補完する小人数のT A演習（T Aとは *Teaching Assistant* のことです）では、受講者のリーディングをチェックし、議論を誘導するという組み合わせは、一部の研究志向の大学では実施されているようですが、なかなか広がっていないようです。その理由というのは、授業は「一人でするものだ」という観念があることと、能力の高いT Aとなる大学院生を確保するのが難しいということに求められます。

ということ、多くの大学では、大講義授業と小人数演習ゼミナールが独立して共存するというシステムになっています。そして、いずれも一人の教員が担当するということが前提となっています。もちろん、インターネットによる授業支援の試みは盛んですが、この基本構造を乗り越える方法はまだ発明されていないと思われます。

まとめると、「受け身」で講義に出席する真面目な学生の授業理解度を上げるように、教員は一人で努力しなければなりません。教員はまさに自分が制御できる

授業自体を改善することに苦心しなければなりません。さらに、授業改善策を考える教員の陥穽は、教員がコントロールできない授業外時間を十分に考慮しないということかもしれません。「参加型の授業」も授業外の予習・復習が無いと、その場だけの授業エンターテイメントになってしまいます。学生が授業外において授業の為に時間を使うようになれば、「量」の側面から、その授業に対する学生の理解度は上がって行きます。さらに工夫して授業外時間を活用するようになれば、「質」の側面から理解度は上がっていきます。いわゆる「参加型の授業」の注意点は、教員がコントロールできる授業時間を参加型にすることに専心するあまり、授業外時間について学生に対してどうインセンティブをつけるか、もしくはどうイニシアティブが働くようにするのかという点を検討することを怠らないかということだと思われれます。

大学教員の教育面での目標は、三つあるという前提で話を始めていきます。第一の目標は、学生がある専門分野について理解度を深めることです。第二の目標は、学生が自ら学び他人に教える方法を身につけることです。第三の目標は、卒業後の社会でなんとかやっていけるやり方を身につけることです。

本書は、以上のような前提のうえで、教員が授業改善のためにやってもよいことについて、かなり前広に細かく書いてあります。学生の潜在能力を引き出すために強めに書いてみたためです。学生がその能力を実際に発揮している場合には、これほど強めに授業をおこなう必要はありません。しかし、私が書いているよりさらに強めに授業をおこなわなければならない場合もあるでしょう。

対象学生として念頭においていたのは、全若者層の学力上位20%から25%近辺にいる学生です。いわゆる偏差値で言えば、50強の学生ということになります。よろいか。大学の学部・学科入試難易ランキングで言えば、私の本務校がそのあたりに位置しています。私が自分で実践した体験をもとに書いているので、自然とターゲットはそのあたりになります。

このターゲット設定には、私の「この層が将来の日本の中間層として実力を発揮すれば、日本社会は上手に引き継がれていくのではないか」という期待も込められています。彼らが「社会人である教員」を唸らせるような参加と自主性とグループ・ダイナミズムを発揮すればよいということになります。ゆくゆくは、社会人に評価される就職もうまくいく可能性が高まるのではないかと思えます。

この本の読者は、大学教員を想定していますが、特に「教育・研究」を目指す大学（Teaching Institution）の教員を対象としています。「研究・教育」の順番で並べているトップ5の研究専門の大学（Research Institution）の教員は一義的な読者ではありません。日本の大学教員数は16万人を超えています。トップ5の教員数が1万人ぐらいとすると、残りの15万人を読者としています。もちろん、私は文系の教員ですので、理系の教員には参考になるところは少ないかもしれません。

最後に、授業改善において大事なことを一つ書きます。それは、教員はさっぱりした格好をしなければならぬということです。もし、何か目安が必要だと思ったら、TVニュースに出てくるNHKアナウンサーの格好を模範としたらどうでしょう。もちろんこれはあくまでも目安です。私がそういう格好をしているというわけではありません。

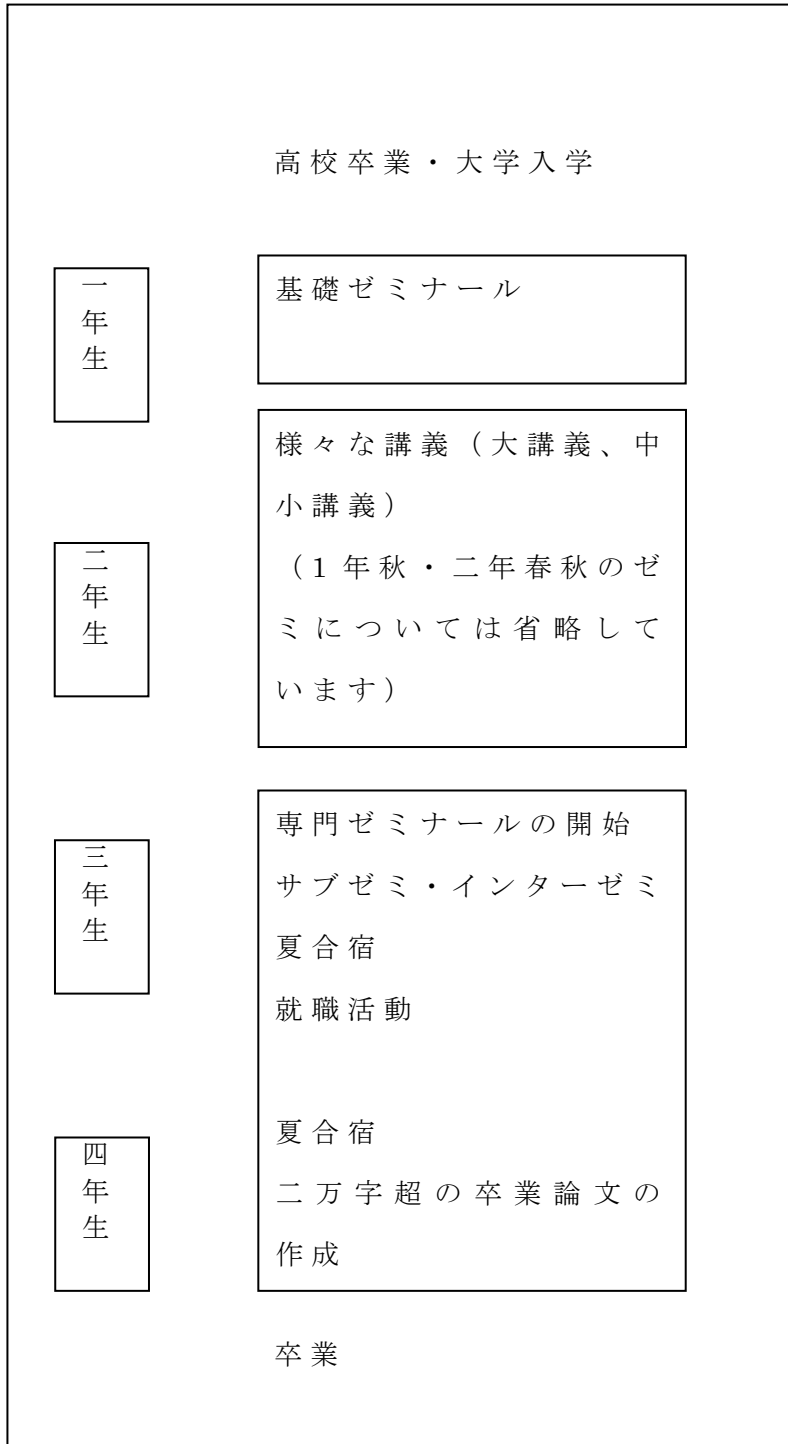


図 本書で想定する学年進行

一章 百人以上の講義科目

本章では百人以上の履修者がいる大講義について解説します。一般教養科目であるとか必修や選択必修と呼ばれる区分の講義科目になります。

1 授業を開始する

Q 講義をするためには教室に行かなくてはなりません。教室に行くと、授業準備をするのが普通です。特に、コンピュータでプレゼンテーション・ソフトを使う場合には、5分から10分の準備時間がかかります。では、あなたの授業について始業ベルが鳴った時（もしくは、開始時間に）あなたはどこにいますか。

- ① 研究室（または非常勤講師控室）を出るところだ。
- ② ちようど教室に入るところだ。
- ③ すでに授業準備が終わっていて、授業を始めるところだ。

A：③すでに授業準備が終わっていて、授業を始めるところだ。

開始時間になったら速やかに授業／講義を始めましょう。それは、教室にいる真面目な学生（それがあなたの味方です）の信用を獲得することに繋がります。例えば、授業においてプレゼンテーションを使う場合には、休み時間の間にそのプレゼンテーションをスクリーンに提示しておきましょう。真面目な学生は、「これから授業が始まるのだな。」と予想してくれます。基本的にはその予想を裏切ってははいけません。

開始時間に授業を始めるということは、休み時間の間に授業準備をするということになります。この時間に学生が質問しにきたりします。簡単に答えられる質問なら答えましょう。しかし、大事なものは開始時間を守ることです。ですので、時間がかかる質問／相談であれば、授業後もしくはオフイス・アワーに引き継ぎましょう。もちろん、授業準備が終わったら、知っている学生と楽しく歓談しましょう。笑いながら喋っていれば、見ている学生は「この教員は笑って喋ったりするんだな。」と思ってくれます。

なぜ開始時間を守らなければならないかという点、二つ理由があります。一つは、あなたの味方になってくれる真面目な学生の好みに合わせるためです。真面目な学生は、教員が真面目に開始時間を守ることを評価してくれます。私が大学生をしていた二五年前には、開始時間に研究室を出る教員が一般でした。すなわち、研究室から数分かかって教室に到着し、黒板を使った講義をおもむろに始めるというのが習わしだったようです。しかし、現在はその習わしは常識になっていません。匿名授業評価の項目にも、教員が開始時間を守っているかという項目がある場合が多いようです。

もう一つの開始時間を守る理由は、授業時間を確保するためです。現在、通年の授業は、いわゆるセメスター制への移行に伴って一四回から一五回の学期毎の授業になっています。一般に教員が教えたいことは山ほどあるはずですが、もし万一、教えたいことが一五回分も存在しないのなら、それは大学授業の型以前の大問題です。おそらく教員になったことが間違いでしょう。

しかし、学生は一時間半の授業に耐えられないので、開始時間を守っても、授業時間前に終わらされてしまう（音を立てて筆箱をしまう、ノートを閉じるなど）

という教員もいるかもしれませんが。そう思う教員は次節まで待ってください。

ティップス1 ① 授業準備中には貴方が好きな音楽をかけましょう。

一般に若者は音楽好きです。音楽が嫌いな学生は非常に少数派です。ですので、授業準備中には貴方が好きな音楽をかけましょう。出囃子ということにしておきましょう。それが、学生の知らない音楽ならそれでも結構です。大事なことは、教室での音をコントロールすることです。開始時間に音楽を止めれば、学生は気がつきます。そこで、授業を始めればいいのです。教室内が騒がしければ、すぐに怒鳴るのではなく、教室を見まわしながら、若干間を取ります。それからおもむろに怒ることにしましょう。すぐに怒ると「怒りっぽい教員」というラベルが貼られます。それは、必ずしも名誉なことではありません。但し、怒るときはかなりの程度まで本気で、なおかつ短く怒ったほうが良いと思います。「普段は機嫌がいいが、怒らせると怖い教員」になりました。

実は、音楽をかけることにはもう一つ隠された意味があります。それは「社会

人文化」を広めることです。大学教員は、社会人として学生に自分をさらすことが望ましいのです。社会人がこんな音楽を好きなのかということを明らかにすることは学生にとって悪いことではありません。学生は社会人経験が不足していると思ってください。

2 授業時間を守る

Q 授業を聞いていると学生は疲れてきます。昼休みのあとであったり、暑くなったりすると寝る学生も増えます。そうすると、授業時間を守れなくなります。では、学生の一定の士気を確保するためにどうしたらいいでしょうか。

- ① 終了時間を早く切り上げて授業を終わる。
- ② 途中休憩を入れる。

A : ② 途中休憩を入れる。

どうぞ途中休憩を入れましょう。但し、アドホックにやってはいけません。途中休憩を入れるのなら、第一日目の授業解説でそう宣言しましょう。約5分の休憩で学生は瑞々しさを取り戻します。心理学の知見によれば、45分を超えて集中力が続くことは難しいそうです。であれば、全員でリフレッシュしてしましましょう。この時間に質問に来る学生もいます。途中休憩をよいことに、途中で帰る学生もいますが、そういう真面目でない学生はもともと貴方の味方ではありませんから、あまり相手にはしてはいけません。

90分の授業であれば、約45分がたったら途中休憩をとりました。この休憩にはまた音楽をかけましょう。ポップスやロック音楽と言われる非クラシック音楽の良い所は三分から五分で一曲が終わるところです。曲の切れ目が授業の再開時です。

途中休憩は、いろんなことに使えます。例えば、私は宿題をこの時間に回収します。回収し終わった後に、正答を配ります。もちろん、このようにするとやや

不真面目な学生は、授業の前半で友達に貸してもらった宿題の答えをせつせと写して出すことになります。しかし、宿題の役割は授業への参加を補うことです。授業評価において、宿題提出は出席を補うものとして位置づけ、配点を小さくすればよいのです。では、宿題を自主的にやった学生と不真面目に他人から移した学生との区別はどこでつけましょうか。それは、中間試験や期末試験の一定範囲について、宿題を元に出題すればいいのです。真面目な学生は、ここで点数を取ってくれます。中間試験と期末試験の配点が高くなります。例えば、宿題提出を含めた出席点を一〇点、中間試験を四〇点、期末試験を五〇点とするというのが一つのアイデアです。

タイプス1② 途中休憩で当日の授業に関する伝達事項を確認しましょう。

何か言い忘れたことがあれば、途中休憩後に伝えることが大事です。これで途中休憩中に教室を離れた学生に情報を伝わらないことになります。もちろん、本当に大事なこと、例えば試験の日程や試験のやりかた(持込みありとかなしとか)

は授業準備時に板書したりして、授業開始時に説明したほうが効果的です。大事なことは、授業終了時の連絡をしたりすると、学生は不正確に記憶することが多いということです。

これで、授業時間の最後まで授業を続けることができます。途中休憩をしたという大義名分は貴方にあるのです。ただし、終了時間を超えて授業をすることは基本的には避けましょう。たとえ一分でも、休み時間は学生のもの、授業時間は教員のもの、途中休憩は教員から学生への贈り物と思ってください。

3 授業ルール

Q 授業の第一日目には授業ルールを明示します。一節で示したように授業準備中にスクリーンに映し出しておきましょう。では、授業ルールとして、明示せず口頭で説明したほうが望ましいものは次のどれでしょうか。

① 授業では食事をしない、化粧作業をしない、携帯電話を使わない。

- ② 授業では他人に迷惑をかけること、例えば私語をしない。
- ③ 授業では眠らない。

A：③ 授業では眠らない。

授業ルールは、授業という公共の場での振る舞いについて躰をおこなうことと、授業を聞く周りの人のことを考えて行動することという二つの社会原則を厳格に学生に守ってもらうために周知徹底します。このときに貴方ができないことは他人に強いてはいけません。貴方がつまらない会議でちよつとでも目を閉じて休憩したことがなければ、「授業で眠らない」というルールを徹底しても結構です。ただし、眠った学生は逐一注意しなければなりません。貴方が会議で内職をしたことがなければ、学生の内職を注意していいはずで、自分ができないことは他人（学生）に強くないというのが三つ目の原則です。

飲食については、セミナーなどに飲料を持ちこんだことがあれば、学生が飲料を持ち込むことを許してもよいはずで、食料については、ブラウン・バッグ・

ランチ・セミナーを除いては一般にはセミナーでは許されないというのが常識の
はずです。化粧作業については、釘をさしておきましょう。

スマートフォンを含む携帯電話については、授業運営によつては使用を喚起す
ることもできます。例えば、授業中にクイズを出題して、それを集計して答える
などということをするためには、学生の携帯電話を活用させるのは一つの方策で
す。しかし、今もなお、全員が全員、携帯電話をもっているわけではありません。
積極的な使用を奨励しないのなら、授業中での携帯電話の使用は、授業への集中
を妨げます。例えば、学生はツイッターを利用して授業中に放課後の予定を調整
したりしています。

私がおこなう規制は、携帯電話を使っているところを発見したら、授業後一時
間半にわたって携帯電話を預かるという方法です。そうすると、まず、携帯電話
を机の上に出して使うようにはなりません。机と自分の間において、教員に見え
ないように使うようになります。教員は、授業ルールを説明する時に、冗談まじ
りに、学生がそういう態勢で携帯電話を使うようになることを真似して見せれば
いいのです。学生にとって重要なのは、携帯電話を使っていると教員に取り上げ

られる確率がそれなりにあることを事前に意識することです。

私語規制は、授業改善の鍵です。貴方の味方となる真面目な学生は、当然、私語を苦々しく思っています。しかし、他人の私語を学生は自らやめさせようとはしません。ですので、教員が強く禁止する必要があります。

授業開始時にかなり強い語調で、「私語をして他人に迷惑をかけて、それを知らぬふりをすることは悪だ」と強調しましょう。学生は、一般に善悪に強く反応します。

それでも、授業中に私語をしているところに気がついた場合があるでしょう。その時は、「何か質問ですか」と尋ねましょう。稀に本当に質問の場合があります。例えば、教員がなすべきことを忘れていた場合などにもそれを指摘してくれたりします。単なる私語の場合には、すぐに収まります。この時、授業運営として、授業中の積極的な参加を呼び掛けたい場合には、私語を注意した後で「どうぞ質問があれば、手を挙げなくていいから、どうぞ声をあげてください。」と言えはいいのです。より秩序立てて授業をおこないたい場合には、「どうぞ質問がある場合には、手をあげてくださいね。」と言えはいいのです。

もう一度、授業で眠らないというルールの検討に戻りましょう。現在の大学生はかなり忙しいです。たとえば、アルバイトをしている場合には、かなり使い込まれています。この点は、後述しますが、専門ゼミナールの運営においては特別企画の日程をアルバイトと争うこととなりますので注意しましょう。かなり重労働のアルバイトをしている場合には、どうしても授業時間割によってはやむをえず、目が閉じてしまう場合もあります。そういう時に無理に起こしても授業に集中できるわけがありません。

結局のところ、私が実施している授業ルールでは、口頭で以下のように申し上げます。『授業で寝たとしても特には起こしません。もちろん、せつかく授業に来たのだから、起きて勉強したほうがいいと思います。そのほうが、あとで宿題を解くのに時間がかからないし、試験勉強時間も短く済みます。しかし、他人に迷惑をかけない限り、つまりはいびきを書かない限りは、起こしません。あと、全員が眠っている場合には授業をしても仕方がないので、その時点で授業をやめます。しかし、一人でも起きて聞いている人がいる限り、授業は続けます。』

授業ルールの説明のほか、第一日目には、授業における成績評価のやり方、授

業目的や教科書を説明すると、だいたい四五分が経過します。そこで、途中休憩して、休憩後は教科書なしでもできる授業を見せます。第一日目には終了時間まで厳密に授業を続ける必要はありません。通常は、履修登録期間は学期の第一週に設定されていることが多く、その意味で、授業参加者の何分の一かはウインドウ・ショッピング気分です。

第一日目に実際の授業を見せるのは、学生の授業評価を考える際にも大事なことです。よく言われる授業評価結果として、参加人数が多い大講義のほうが少数講義よりも総合評価が低くなるというものです。その説明として考慮すべきなのは、参加人数が多いということは授業を取ろうとする事前の動機付けが低い学生が多く混じる可能性が多いということです。例えば、時間割を理由として授業履修を考える学生がいます。必修授業が第二時限と第四時限に入っている場合には、第三時限にも何か授業を入れたいという学生がいます。特に、貴方の科目を勉強したくもないのに時間割だけが理由で履修する学生は、多くの場合には授業評価で貴方の授業を低く評価します。

こういう学生に、当事者意識を持ってもらうためにも、第一日目に多少なりと

も講義をおこなうことは重要です。貴方がやや厳格な雰囲気を持っていれば、それを嫌う学生は他の科目に逃げていくでしょう。元々の履修目的が、この時間に授業を入れたいという理由からだけだからです。

ティップス1③ 授業第二日目の冒頭にも、授業ルールを簡単に説明し、重要な箇所を説明しましょう。

大事なことは繰り返し説明するのが当然です。また、授業第二週目の第二日目に初めて出席する学生もいます。もちろん、初日から出席するのが普通ですから、前回に出席しなかった者に手を挙げてもらい、「前回にちゃんと出席した人には二回目で申し訳ない」などと言いつきをしながら、授業ルールを繰り返し強調しましょう。

4 中間試験

Q 中間試験をやりましょう。学生は、自分の理解を試すことができます。教員は、どの程度まで学生が理解しているかを試すことができます。必ず、翌週までに成績をつけて学生に結果を返却しましょう。あまりに履修学生数が多ければ、マークシート試験でおこなうことを検討しましょう。授業の折り返し時点で、学生自身が自分の到達度を確認することが大事です。学生にとって難しい科目であれば、この段階で自己救済措置を課すこともできます。返却する際には、トップ一〇程度までの学生に何か飴などを一緒に渡してください。飴を渡す目的にあてはまらないのはどれでしょうか。

- ① 学生の好成績を表彰する。
- ② どのような学生が好成績を取る学生なのか確認する。
- ③ 翌週にその学生が授業に現れるかどうか確認する。
- ④ 学生間でどの学生が好成績を取ったのか認識させる。

A：①～④まで全てが飴を渡す目的です。

百人以上の試験では、どの学生が誰かは覚えることは通常できません。せっかくのテストで高得点を取ってくれた学生を表彰するのは別に悪いことはないでしょう。それもたった一人を表彰するのではないので、学生からしてもストレスはないと考えられます。そもそも、答案を返却する時に飴の入った箱を見せて一個どうぞと指図するだけですから、あんまりたいしたことではありません。

しかし、学生の顔を見ながら、この学生が高得点を取ったのだと考えるのは、自らの授業を考えるうえで悪いことではありません。その学生がどのあたりに座っているのか。同じようなグループから何人も高得点者が出るのか、などを考えてみましょう。もし、高得点者が前のほうに座っていたら、授業後にどんな勉強をしたのか尋ねてもいいかもしれません。

また、もし学生の顔を記憶に留めていたら、これらの学生が翌週の授業に現れるのかをぼんやりと確認してもいいかもしれません。ひよつとしたら、テストだけ出席して、自習で高得点をとっている学生がいるかもしれません。そうである

としたら、翌年の授業内容を改善できるかもしれません。例えば、授業に出る学生がより高得点を取るように、中間試験の前週に試験対策をおこなうとか考えてもいいでしょう。授業に出ない学生が高得点を取るということは、何か授業に改善点があることを示しています。

さらに、高得点を取った学生を周りの学生が知ることによって、グループ学習が促進されることも期待できます。一般に、ある科目を教えることができれば、その授業を理解していると考えられます。高得点の学生を中心に、グループでその教科について教え合いが展開されれば、授業の理解度が上昇することが期待できます。

なお、私は中間試験を返却するに際して、極めてぶっきらぼうにこう述べています。『では、これから皆さんの解答用紙を番号順に返却します。なお、恒例により、トツプ一〇には飴が出ますので、もらっていただくください。』飴は一個一〇円に満たないものですから、あんまり時間をかける必要はないのです。

最後に、重要な点ですが、試験に際して持込みを禁止したほうが、事前に勉強するようになります。但し、この点は、授業の第一日目に明確に言うておく必要

があります。

ティップス1④ 中間試験の前週にその過去問題を配布しましょう。

これはその大学、その学部・学科の「制度」（＝習慣）によりります。学生自身で、過去問を集め、ノートがコピーされ、試験対策プリントが作られている大学、学部・学科では、過去問題を配布する必要はありません。しかし、そういう「制度」が確立されていない大学では、教員自らが過去問題を配布したほうがよいと思います。なぜならば、学生はどうかやって勉強するかわからない時には、勉強時間を少なくするからです。

大事なことは、学生の授業外での勉強時間を増やすことです。宿題もその目的のためですが、中間試験のための試験勉強こそが授業の大事な目的です。もし、学生が勉強しないのであれば、過去問題を配布して、同じではないが似たような問題が出題されると予告したほうが学生の勉強時間が増加するはずですが、

過去問題を配布する時には、正解を配布するかも検討してください。答えがな

くても自分で考えながら勉強する学生もいれば、答えが無いと勉強する気を失う学生もいます。貴方の学生はどんな学生なのかを考えながら決定すればいいのだと思います。

タイプス1⑤ 中間試験を返却する際に自己救済措置を示しましょう。

成績評価が大きく中間試験と期末試験によって左右される場合には、あまりに中間試験が悪い場合には、それだけで単位が取得できないことが決定されてしまう場合があります。また、中間試験日に病気や他用で欠席をする学生もいます。彼らはしばしば救済措置を求めてきます。それらにアドホックで対応すると非効率なので、中間試験を返却する際に、ある閾値を決めて、その点以下では、自己救済措置をやれば、その点までは点数を復活できると予告することが有効です。この閾値は、期末試験でどのくらいとれるかを想定しながら、決めるのが大事です。目安は五〇〜七〇点、例えば六〇点が目安となります。

5 期末試験

ここまで順調に來れば、期末試験に際して、前週に過去問題を渡して、期末試験をおこない、それを採点して評価すればよいはずですが。

私の経験からは、期末試験の成績は、中間試験の成績よりも悪くなることが多いものでした。ある程度までそのことを予想しながら、問題を作る必要があります。期末試験の成績がやや悪くなる理由には三つぐらいの理由があります。

第一に、中間試験と異なって、期末試験時には多くの試験やレポートが重なります。このために貴方の授業のためだけに勉強を専心してくれなくなります。勉強時間が減少すれば、点数は自ずと低下します。

第二に、中間試験で高得点を獲得した学生の一部は、期末試験に向けてあまり勉強時間をかけてくれません。彼らは、他の授業により時間を振り分けているのか、もしくは、この教科では単位修得が目的で、好成績をとることが目的でないかと思われる。このため、中間試験高得点者の期末試験成績にばらつきが出ます。

第三に、ある学問は次第に難しくなってくるものですから、中間試験の出題範囲の困よりも期末試験の出題範囲のほうの方が難しくなるのが当然です。出題範囲が難しくなるのですから、成績が悪くなるのも無理はありません。

以上のような点を考慮しながら、期末試験問題を作って、出題することになります。ご配慮ください。

ティップス1⑥ 貴方の基幹講義については毎回、授業最終回に匿名授業評価をおこないます。

全ての授業について匿名授業評価をおこなっている大学の場合は問題ありませんが、予算などの関係から、限定数だけ匿名評価をおこなっている大学も存在します。そういう大学においても、貴方の基幹講義、すなわち多くの学生が集まって、自分の看板講義だと言える講義については、毎年（もしくは毎学期）の授業最終回に匿名授業評価をおこないます。

その結果は、翌年（翌学期）の授業の第一目目に発表すればいいのです。この授業を履修すると、目安としてはこのくらい総合評価になりますよと伝えてあげればいいのです。学生は多くの授業で匿名授業評価をおこなっていますから、授業評価の点数についても自分なりの感覚をもっているはずです。

授業評価については「楽天みんなのキャンパス」などでも評価されますし、口コミでも評価されます。それでも匿名授業評価は、多くの出席者の評価の集計ですし、学生は真面目に評価に取り組んでくれます。

記述式のコメント集を第一目目に回覧することも検討してください。一つの授業については多くの評価が存在します。三者三様です。大講義であれば、話し方が速いとコメントする学生もいれば、遅いとコメントする学生もいます。そういう他人の意見を見せてあげることとも考えてください。

二章 百人以下の講義科目

本章では、百人以下の講義科目（目安としては五〇人程度）を対象とします。多くの点では前章と重複する点がありますので、前章の記述も参考にしてください。授業区分では選択的な授業と区分され、やや学部としては専門的な講義科目になります。

1 時間割設定を工夫する

前章で説明したように、学生は時間割によっても履修を決定します。たとえば、この曜日にはアルバイトを終日入れるので授業を取らないということがあります。同様に、一時限のような早起きが必要である授業や、五時限のような最終期限のために学校に残っている必要がない授業については、時間割からの履修意欲が小さいと考えられます。ですので、一時限や五時限を時間割の中で選択することをお勧めします。

時間割の設定が決まったら、授業準備をしましょう。わざわざ一時限や五時限に来る学生を相手にするのですから、彼らは多少なりとも意欲があると想定すべきです。

2 英語で授業をすることになったら

Q 最近日本人相手に英語で授業をするのが流行です。この流行は定着するかもしれません。実際のクラス運営のための英語については、中井俊樹編『大学教員のための教室英語表現300』（2008、アルク）などの良書を参考にしてください。では、第一日目に授業についての通常の説明が終わりました。では、最初に何をしましょうか。

- ① 普通の講義を始める。
- ② ウォーム・アップと称して参加型のエクセサイズをおこなう。
- ③ 宿題を解説する。

A：②ウォーム・アップと称して参加型のエクセサイズをおこなう。

できれば、参加型のエクセサイズは毎回の授業の最初にやりましょう。一回のウォーム・アップは一週間もちません。ですので、翌週もウォーム・アップする必要があります。英語ではIcebreakerと言います。ウォーム・アップのやり方がわからなければ、icebreakerでインターネットを検索すればたくさん方法が出ていますし、もちろん、いろんな参考書があります。Newstrom and Schannell (1996) とか、Chambers (2002) とかを参考にしたらよいと思います。

ティップス2① 目一杯までマルチメディアを利用しましょう。

英語で教える場合には、できるだけ英語動画を利用しましょう。教員が英語で喋るだけでは、聴覚のみを利用することになります。視覚を利用できるのが動画教材です。例えば、TED (www.ted.com) は、英語のスク립トもあります。

このほか、英語の教科書を利用する場合には、オーディオCDがあると疑似マ

ルチメディア教材を作ることができます。教材の作り方については *Brinton, Snow and Wesche (1989)* を参考にすることができます。

3 自分の講義がクリティカル・シンキングに対応しているかを検討する

ここでは、英語講義ではなく日本語講義を検討します。どうしても自分の専門に近い講義になると、教員は説明をたくさんしてしまいます。結局のところ、情報提供の授業になってしまいます。学生が自ら情報を知識に体化させる手助けをするのが授業ですから、学生が情報を知識に変える作業がきちんとおこなわれているかを確認する必要があります。それを担保する一つの方法が、自分の講義がクリティカル・シンキングに対応しているかを検討することです。クリティカル・シンキングとは一言でいえば「正しい突っ込み（質問）ができるか」という能力です。これについてはいくつもの専門書がありますので、それを参照すればよいと思います。ここではブラウンキーリー（2002）を元に学生が正しい質問をもてるかという一点にしましょう。

ティップス② 正しい質問を意識させるには、質問票を配って、自分が考えた複数の質問を書き込み、さらに重要度をつけて記入させるという方法があります。

動画などマルチメディア教材を使うと、学生は映画館で映画を見るように、受け身の態勢になってしまいます。「どうしてだろうか?」「なぜだろうか?」という質問が出てこなくなってしまう。最近の映画やTVはそれほど優れているのです。いわば質問が出てくるように動画を見せるのがクリティカル・シンキングの第一歩と言えます。

もちろん、質問に対しては何らかのフィードバックをしないといけないのですが、必ずしも全ての質問に答えなければいけないわけではありません。もっとも優れた質問をいくつかピックアップ・アップして応じていくのが良いと思います。そういう経過を通して、学生はより優れた質問をするように自らを秩序立てていく可能性があります。

以上のように、小人数から中人数講義では中身だけでなく教え方にも試行錯誤を導入して、いろんな教え方に挑戦する必要があります。それが、一定の効果を

上げた場合には大人数講義に導入していくことも検討できます。

三章 一年生春学期の基礎ゼミナール

河合塾編『初年次教育でなぜ学生が成長するのか―全国大学調査からみえてきたこと』（2010、東信堂）を読むと、一年生春学期のいわゆる基礎ゼミナールと言われる少人数演習授業の大切さがわかります。基礎ゼミナールで一年生は基礎的なスタディスキルを学ぶだけでなく、知り合いを増やしていくのです。

河合塾編（2010、6頁）を読むと、初年次教育の目的とは次の八つとして
います。

- ① 学生生活や学習習慣などの自己管理・時間管理能力をつくる
- ② 高校までの不足分を学習する
- ③ 大学という場を理解する
- ④ 人としての守るべき規範を理解させる
- ⑤ 大学の中に人間関係を構築する
- ⑥ レポートの書き方、文献探索方法など、大学で学ぶためのスタディスキルやアカデミックスキルを獲得する

⑦クリティカルシンキング・コミュニケーション力など大学で学ぶための思考方法を身につける

⑧高校までの受動的な学習から、能動的な自立的・自律的な学習態度への転換を図る

河合塾自体が②③④を調査から除外しているので、1年の基礎ゼミナールはその小人数という特徴からも①⑤⑥⑦⑧の目的を果たす本丸と言ってよいと思います。河合塾も『能動的・自律的な学習への転換は双方向的、協働的な活動を通して身につけ、それを繰り返し体験させる場面の多くは正課の「初年次ゼミ」にピルトインされていると考えた』と記しています。

また他方、多くの大学では、スタディスキルとキャリア・デザインに関連した小冊子を入学時に一年生に配布していますので、基礎ゼミナールの内容をこういう大学配布の冊子に準拠することも考えましよう。

「初年次ゼミ」においてあまり意識されていないことを三つ記しておきます。一つ目は、日程の問題です。もう一つは、高校卒業生が誰から学んでいくかということです。三つは、失敗の重要性です。まず、日程の問題はとても大事です。

五月の最初にゴールデン・ウィークがあるということでした。ここで、学生は一息つくわけですが、それが、「自分は本当に何をしたかったのだろうか」という自分探しの五月病を始める一つの要因にもなります。ですので、ゴールデン・ウィークまでの基礎ゼミは、一年生がお互いを知りながら、ゼミの作業が多少は面白くやりがいがあり、参加することにメリットがある状況を作り出す短期決戦だと考えましょう。

ゴールデン・ウィーク後は、より腰を落ち着けてエクセサイズを繰り返し消化することができるようです。エクセサイズをこなした後、最終成果物を作ります。これを全員で作り出せば、基礎ゼミナールはフィナーレになります。

もう一つの大事な点は、大学での学びは、問題の答えや答え方（解法）を覚えるといった高校までの主流の学びを超えて、学び方を工夫して学んでいくというラーニング・バイ・ドゥイングのダイナミズムをどういう風に作っていくかです。私の経験では、教員が見本をやってみせたときに学生が真似ていくというプロセスは弱いのです。それよりも、ある学生が良いパフォーマンスをしたときに教員が的確に誉めて方向付けをすると、見ていた学生が一斉にその方向に真似を

していきます。すなわち、学生には同期意識が強く、同期から真似るが学ぶに変わっていくというダイナミズムが非常に強いように思えます。

最後に、基礎ゼミナールのモットーは「大学では挑戦して失敗することが重要」になります。当然のことですが、誰もが失敗を嫌がります。しかし、嫌がるがゆえに挑戦をしないようになります。『後から後悔しないように行動する』ことは保守的な活動になりやすいのです。それが故に、「大学では挑戦して失敗をしながら学ぶのが大事です。失敗しないのなら大学にいる必要はなく、社会に出れば良い。」というメッセージを強く打ち出すことが大事です。そういう言葉のもとで、一年生が挑戦する環境を作ることが重要です。ただし、失敗したままで放置するのは良くないので、同じエクセサイズを複数回設定しておくことが大事です。周りがそのエクセサイズができた、自分もできるようになりたい。初回は失敗したから、二回目は成功したい、そういう気持ちで周りから真似る。学ぶようなダイナミズムを作っていきます。

1 ゴールデン・ウィーク前になすべきこと

Q では、ゴールデン・ウィーク前の短期決戦について具体的に述べていきましょう。ここでは、グループ・ワークと個人で誰もができる宿題を組み合わせてみます。グループ・ワークは知識を問う簡単なクイズから、やや頭をひねる地頭クイズまで学生の調子に合わせて使っていきます。自己紹介から問題を解き、誰かが発表し、正解を発表し、多少の報酬（例えば飴）を配る。そして、新しいグループに配置換えし、また、クイズにグループで取り組む。こういう作業の中で、一年生のお互いがお互いを知る合う状況を作ります。

では、誰もができる宿題とはどういうものを設定しましょうか。

- ① 自己紹介シート
- ② 「家族の中の私」というようなエッセイ
- ③ 自己紹介シートと「家族の中の私」というようなエッセイの組合せ

A：③自己紹介シートと「家族の中の私」というようなエッセイの組合せ

学生は二つの宿題ぐらいはちゃんとやってきました。この二つの用紙は全員分印刷して、冊子にして共有し、これをお互いに自己紹介の補助に使ってもらおうということもできます。提出物は期限までに守ってもらうことが大事です。

ティップス 3 ① 必ず初回の授業において学生の携帯メールを手に入れることが重要です。

学生の生活に踏み込みたくないという理由で学生の携帯メールを入手することに二の足を踏む教員もいるかもしれませんが、用途を明示すれば、学生は携帯メールを教えてくれます。その用途とは、宿題の提出をチェックすることです。提出の期限を守らない時に、学生に警告を発することが必要になります。その場合に携帯メールが最適です。

また、学生に携帯メールの書式から、いわゆるPCメールの書式に慣れてもら

うことも副次的な目的です。学生は一般に、お互いの携帯メール・アドレスを登録した後、お互いの交信には、件名を書かず、宛名を書かず、本文のみ書き、自分の名前を書かないのが普通です。それでも、お互いのアドレスは登録されているので、誰からメールが来たことが明らかだからです。ある意味、テキスト・メッセージを送っているという風に理解すればいいわけです。学生の中には、リンク・メールがたくさん入ってくるという理由から、数年で携帯メール・アドレスを変更して、その際に知人をより分ける人もいます。

一年生の基礎ゼミナールの大事な一要素が①件名を書き、②宛名で始め、③本文を書き、④自分の名前で終わる、というPCメール四原則を一年生に叩き込むことです。TOやCCやBCCについては、専門ゼミナールでの作業に回します。こういうことはPC教室でおこなう情報系の授業に任せればという意見もあるかもしれませんが、しかし、私の経験では、基礎ゼミナールで実地訓練しないと情報は体化せず、知識にならないようです。

ティップス3② 第一日目のグループワークにおいて、自己紹介する名札を作ら

せ、グループワークをしている間にグループ毎に写真をとりましたよ。

この写真を使って、名前と顔を一致させる努力をしましょう。名札を見せてもらいながら写真をとれば後から顔と名前を一致させる訓練ができます。学生は、高校生の間は教員の誰かに名前を覚えてもらっていたはずです。もちろん、大学はその匿名性が一つの鍵なのですが、移行期間である一年基礎ゼミナールでは担当教員が名前と顔を一致させることは学生に安心感を生みだします。

プライベートの観点から、写真を撮りたくないという方、それから基礎ゼミナールの人数が多くて、どうしても顔と名前を一致できないと言う方は、次善の手段です。ひもの付いた名札を用意しましょう。これに名前を書いてもらって、毎回名札をテーブルから取っていってもらいます。残った名札が欠席者ですというのを学生に明確にすれば、学生は気楽に名札をかぶっていきます。そして、グループワークをしてもらいながら、教室を回って、出来るだけ多くの学生の名前と顔を一致させていくのです。

このように期日を守って提出物を出し、少しずつ難しくなるグループワークを

こなしながら、基礎ゼミナール構成員のお互いがお互いを知り、自分が知られて
いることを知るといのがゴールデン・ウィーク前に達成すべき事柄です。ゴー
ルデン・ウィーク後に備えて、教科書を多少は読んでもらうという作業も仕込ん
でおきましょう。

2 ゴールデン・ウィーク後の基礎ゼミ本番

Q ゴールデン・ウィーク後になすべきことは、学生の「読む力」「書く力」そ
して「考える力」の点検です。それを団体戦と個人戦に分けておこなうと効率
が良いというのが私の経験です。団体戦は発表をしてもらいますが、留意点は何
でしょうか。

- ① パワーポイントなどのプレゼンテーション・ソフトを使ってもらおう
- ② 手書きのレジュメを見本としてわたす

A：②手書きのレジюмеを見本としてわたす

団体戦とは、グループで教科書の指定個所についてきちんとしたレジюмеを作
って発表するという作業です。教科書は、一冊の本でたくさん短い章から構成
されているものがお勧めです。例えば、立花隆他『二十歳のころ（1）（2）』（新
潮文庫、2001年）や、奥井真紀子Ⅱ木全晃『ヒットの法則』（日経ビジネス人
文庫、2006年）『ヒットの法則2』（日経ビジネス人文庫、2009年）がお
勧めです。立花他（2001）であれば、二十歳のころに何をしたらよいのかと
いうことについて学生は自ずと考えるでしょうし、奥井Ⅱ木全（2006、20
09）では、企業でヒット商品を生み出すのにどのような人々がどのような思い
で関わっているかを感じるができるでしょう。

レジюмеについては、見本を示すことが大事です。全ての演習ゼミナールでは、
「型くずれ」から「型どおり」を抜けて「型破り」になるのが目標です。第一段
階の「型くずれ」（もしくは「型なし」）から「型どおり」になるためにはどうし
ても見本が必要です。要するに、教員は学生に型を見せる必要があります。

発表においても、型を示す必要があります。視線を動かして全体を見回す、手を腰より上にあげて動かし、スクリーンに映したレジュメを指示棒で指すなどを箇条書きにして鉄則として文書で配布し、教員が実演すればいいのです。

実際の発表では、教員は学生の後方に位置して、発表の方法をチェックします。発表が終わった後は、できれば発表者に感想を求めると良いと思います。そして、気がついたことをコメントすればよいのです。

個人戦では、発表課題についてコメント・ペーパーを各人に書いてもらいます。A4×1枚を形式どおりに書いて、PCメールの添付で教員まで期限通りに送るという作業です。どういう形式かと言えば、前半を要約、後半を自分のコメントとする構成です。コメントは、感想よりも「自分の質問＋その答え＋論証」のほうが優れていると言いながらも、最初は感想でもいいですと目標を決めましょう。

ティップス③ ③ 提出物は赤字を入れて、全員分を印刷して、全員に配ることが肝心です。

ゼミ当日に、加筆修正した提出物を書画カメラなどでスクリーンに映写して、教員はコメントをつけましょう。間違いは指摘し、良い点を誉めましょう。赤字のついた提出物は学生に返却します。返却よりもゼミでの情報共有が大事です。学生は当然ながら、自分の提出物に赤字が入っていると喜びます。しかし、それでは次回にそれを修正するのか担保できません。また同じような間違いを他の学生がすることを予防することもできません。

そこで、すでに示した「大学は挑戦して失敗するところ」というモットーに頼ればいいのです。そういう前提のもとで、コメント・ペーパーの成果を良い点も悪い点も全員で共有しましょう。そして、良いペーパーについては、これを真似しましょうと誉めましょう。学生は自らの横に見本を見出して、そちらに近づこうとします。重要な点は、カムバック（フアイト・バック）の機会が学生に残されていることです。ですので、コメント・ペーパーを執筆する機会を必ず複数回は用意しましょう。

コメントの基本は、「自分の質問＋その答え＋論証」だと申し上げました。これは卒業論文にまでつながる大学での学びの基本です。「読む力」「書く力」そして

「考える力」はこのような作業をする中で学生に自ら育ててもらいましょう。

クラス・サイズで言うと、20人から25人程度までこの方法でうまく行きま
す。1グループ4人から5人で組織すると、「レジュメ作成・発表」グループ、「コ
メント・ペーパー執筆」グループが二つ、あと2グループ余ります。彼らを質問
グループとエンターテイメント・グループに組織しましょう。

質問グループは、レジュメ発表に対して文字通り質問をするグループです。な
かなか学生は進んで質問をしたがらないことが多いので、このようにして、まず
は演習のなかで質問がおこなわれることを担保していきましょう。エンターテイ
メント・グループは実はトリッキーです。レジュメの発表とコメント・ペーパー
への教員コメントが順調に進行すると、一時間半の授業が20分から30分ほど
余ります。この空き時間をエンターテイメント・グループに「知的」に運営して
もらうのです。多くの場合は、経験上、学生はゴールデン・ウィーク前の教員の
作業に倣って、クイズを実施します。もちろん、デイベートやディスカッション
を実施したりするように誘導しても結構です。但し、できるだけ学生の自主性を
尊重したほうが、ゼミらしくなります。レジュメの作成・発表がいわゆる「規定

演技」であるとする、エンターテイメントは「自由演技」になります。

以上の基礎ゼミナールの諸活動を情報リテラシーから整理しましょう。まず、携帯メールと異なるPCメールの書き方は、情報リテラシーの基本です。次に、コメント・ペーパー執筆はMSワードなどのワード・プロセッサを使えるようになります。加えて、エンターテイメントにおいてはMSパワーポイントのようなプレゼンテーション・ソフトを利用することを勧めてもいいかもしれません。但し、レジュメ作成と発表においては、プレゼンテーション・ソフトの使用はあまりお勧めしません。図表や記号の使い方においてプレゼンテーション・ソフトはまだ発展途上だと考えるからです。手書きでのレジュメが作れば、プレゼンテーション・ソフトは作れます。その逆は必ずしも真でなさそうです。以上のように振り返ると、MSエクセルに代表される表計算ソフトを使用していないことがわかります。ここが文系の基礎ゼミナールで残された課題です。私の経験上では、この部分は1年秋以降の演習ゼミナールでの課題であるように思います。

3 最終成果

Q 私が最終報告書の課題としたものは、他人にインタビューしてそれをA4×1枚にまとめるという作業です。私が一貫して採用してきたテーマは「親・兄弟・担当教員（私）以外の人に二十歳のころ」を尋ねるというものでした。これは、これまでのコメント・ペーパー執筆作業を生かした課題です。

全ての演習ゼミナールは最終成果を形にして残すことが大事です。それは唯一重要な目的ではありませんが、携帯電話やコンピュータなどでヴァーチヤルな情報に多く触れている学生にとって、紙媒体での最終報告書はそれなりの意味をもつように思います。では、最終報告書を作った時に何を言いましうか。

① 最終報告書は捨てないで記録として残しておくようにと言う

② 最終報告書の一冊はインタビュー相手に差し上げ、もう一冊は学費を出した保護者に差し上げて「学費を有難うございました」と言うようにお願いする

A：②学生がインタビュー相手ともう一度会うのは大事なような気がします。

祖父、祖母、高校の教員についてのペーパーが多く集まるのですが、高校の部活のコーチであるとか、親戚の叔父叔母や、アルバイトで知り合った人なども出てきます。つまり、読者からは大学一年生の周りが見えてくるということになります。すなわち、一年生が何かアドバイスを欲しい時に、親・兄弟以外に相談するかもしれない人々が見えてくるということにもなります。

学生からすると、自分の目上の知り合いに二十歳のころは何をされていたのですかという質問はあまりしないものです。大学の基礎ゼミの課題であるという大義名分を与えれば、意外と楽しんで尋ねるようです。コメント・ペーパーを書くときには、自分の現在を容赦なく振り返ることにもなります。

インタビュー原稿を集めて、簡易製本して二冊渡しましょう。一冊は自分のため、そして学費を出してくれた親のためです。私は半分冗談交じりに「お父さん、お母さん、私は春学期これぐらい勉強しました。」と言って報告書を見せなさいと言います。もう一冊はインタビュー相手に渡しなさいと言います。つまり、学生

はインタビュー相手に二度会うことになります。ひよつとすると、二回目には何か相談をするかもしれません。そういう回路を開いてあげることが基礎ゼミナールの担当教員としての配慮になります。

このように基礎ゼミナールを仕上げると、残された課題は二つです。一つは、表計算ソフトの使用です。文系にとって、表計算ソフトで数字を使えるようになるのは大きな武器なのですが、ここはやっていないと学生に最終授業で申し上げます。もう一つは、質問の精度を上げるといいうわゆる「クリティカル・シンキング」の作業です。この二つが、一年秋から二年生までの演習ゼミナールでの課題になると思われます。

四章 卒業までの専門ゼミナール

卒業までの専門ゼミナールは、就職活動の面接において採用担当から何を勉強しましたかと尋ねられた時に答える内容の中心をなします。大学での勉強は採用プロセスにおいて少しずつ評価のウェイトが高まっているように思われます。これは印象論にしか過ぎませんが、学業に比べると、大学生時のアルバイト経験やサークルでの経験は採用プロセスでの評価が下がっているような気がします。その理由は、アルバイトのマニュアル化が進み、大卒後の仕事で必要とされるマニュアルなしの仕事と対応していないということがあるような気がしています。また、サークルでの人間関係はやや上下関係が薄くなっており、同期だけの関係が強まっており、上下・世代が存在する企業の中での仕事の実際と合わなくなっています。そういうなかで相対的に、大学での学びの重要性は変わっていないのかもしれません。きちんと勉強している学生がいることを会社は気がついていきます。

また、専門ゼミで形成した人間関係は、学生の大学時の人間関係の一つを構成します。OB／OG訪問ができるのも専門ゼミでは普通ですし、卒業後は自分が

OB／OGになって現役学生の訪問を受ける場合もあります。こういう縦の関係が上手に体験できるのも専門ゼミの良い所です。

専門ゼミは大学・学部・学科によって開始時期が異なります。大別して二年生から始まる場合と、三年生から始まる場合があります。選考プロセスは前年、すなわち、二年生の場合是一年生の秋学期、三年生の場合是一年生の秋学期にありません。序章に書いたように、大学生は縦の關係に弱いので、他学年との交流をどのように設定できるかが大事です。上下が上手に繋がると情報が知識となって伝達され、明示的に教員が教えなくても知識が伝わって制度化していきます。

このような制度化が弱い場合には、明示的にゼミナールのスローガンを決めるのも一つの手です。例えば、私は『IQも愛嬌も』という駄洒落のようなスローガンを設定しました。これは専門ゼミでIQも伸ばし、愛嬌も伸ばそうという心意気を示したものです。このように基本線を設定しておく、専門ゼミのデザインは、IQと愛嬌を学生自身が自分で鍛えるように配慮すればよいということになります。例えば、ゼミ・コンパと呼ばれる飲み会の幹事も愛嬌面から言えば大事だと言うことになります。

こういう人間関係で言えば、専門ゼミの同期のダイナミズムとしては、教員なしでどこかに全員で遊びに行くようになればほぼ成功と言えます。教員ありでないと遊びが成立しないのであれば、専門ゼミ全体の人間関係は必ずしも良好でないかもしれません。

専門ゼミに関しての一般論の最後として、どのような学びを内容として設定するかということを考えましょう。私が考える目安は「25歳になったときにまだ使える内容と、学ぶことを学ぶ教育」です。これは、私の想定する『キャリアのホップ・ステップ・ジャンプ仮説』の中で考えています。目安として、20歳から25歳まではホップ期、25歳から35歳まではステップ期、そして35歳から60歳までをジャンプ期として考えています。最終的な目標は35歳から65歳までの30年間毎日をプロとしてジャンプし続けられるように、後ろから考えてホップとステップを設定していくということになります。ステップ期ではジャンプする業界が決まり、プロとしての技術が育たなければなりません。キャリア・チェンジと呼ばれる業界の変更をするのもこの時期ですし、MBAなどの職業大学院に行くのもこのステップ期になります。では、20歳から25歳までのホップ

プ期には、社会人としての基礎的な素養が身に付き、人のふりを見て自分のふりを整え、必要な事項は上司や先輩に「報告・連絡・相談」できるようになり、昼食をグループで食べながら、嫌いでない仕事を回していけるといいう段階になります。

そういうキャリア仮説のもとでは、専門ゼミナールでの学びの内容は、ホップ期からステップ期の境目になる25歳になったときにもほぼ全てが使える内容であればよいというのが私の目安です。世の中の学問は日進月歩で進んでいきます。大学での学びそのものが30代でも40代でもそのまま使えるとしたら、その分野は停滞していると言わざるをえません。そういう変わりゆく時代の中では、学ぶ能力を身につければよいのです。ですから、専門ゼミナールで学ぶ内容の全ては真にキャリアを考え始める卒業後3年後ぐらいまで使えればよいのだと私は考えています。もちろん、学問の枠組みそのものは30代でも40代でも使えるものが当たり前であることは言うまでもありません。

1 選考プロセス

Q 専門ゼミナールの選考プロセスでは、一般には学生の希望者が一定人数を超える場合には、担当教員が選考できるという場合が多いでしょう。「自己選択」を上手に使うのが大事です。一般には、学生はそれまでの講義の感触から、専門ゼミナールの選択を決めることが多いと言えます。もし、貴方が学部・学科で平均以上の人気教員であるのなら、貴方が学生を選考できる可能性は高いでしょう。但し、多くの学生を落とすことは学部・学科としてはあまり良いことではありません。落とされた学生は第二希望以下の専門ゼミナールに所属することになるからです。もし、貴方の専門ゼミに人気があるのなら、どうしていきましようか。

① 人気が持続するように中身を維持していきましよう。

② その翌年は、学生の状況を見ながらより難しい内容にしていきましよう。

A：②その翌年は、学生の状況を見ながらより難しい内容にしていきましょう。

そうすれば、落とす学生の数を減らすことができます。学生自身に自ら選択させることによって、貴方はより難しい内容をゼミに組み込むことができます。

学生が自ら適切な選択を行うためには、情報提供が大事です。できるだけ、ゼミ生（上級生）にお願いして情報提供をしましょう。そうすれば、単に情報が提供されるだけではなく、自分の一年後、二年後をゼミ志望者は意識することができます。そして、ゼミについて担当教員の知らない（気がつかない）情報さえも下級生に流れていくことになります。ゼミ上級生にとつては、大切な「振り返り」になります。

ゼミの選考プロセスのスケジュールは、学部・学科によって異なります。二年生から専門ゼミが始まる場合は一年生秋学期に選考プロセスがあります。専門ゼミが三年生から始まる場合は二年生秋学期に選考プロセスがあります。現在のように入学生の就職活動が三年生秋学期から始まることを考えると、二年生秋学期に選考プロセスがある場合には、より就職活動を念頭において選考プロセスをデ

デザインすることが求められます。すなわち、志望書をエントリー・シートと置き換え、面接を採用面接と置き換えて考えてもよいのです。就職活動に対する指導については次章で述べます。

もし貴方がゼミ教員としてゼミの志望書をデザインできるとしたら、①自己PR、②自分がこれまでの学生生活で打ち込んだこと、③志望動機、というエントリー・シート三種の神器を、志望書に盛り込んでもよいでしょう。もし選考プロセスが二年生秋学期に行われるとしたら、一年後にこれらの要素について対象企業に置き換えて学生は書くことになるので、学生の就職活動における第一関門の状況を想像することができません。

では、学生の自己選択を超えて、更に学生数を制限しなければならなくなったときに、どういう学生を貴方のゼミに選べばよいでしょうか。もし貴方がゼミ生の就職実績に強い関心があるのならば、選考プロセスにおいて、貴方が企業の採用担当のような目で振る舞えばよいことになります。人間は一年や二年ではあまり変わりません。

しかし、それが唯一の選考基準ではありません。先ほど説明したキャリア形成

のホップ・ステップ・ジャンプ仮説に従えば、25歳までの就職三年目までに千問ゼミナールの教育は大きく影響することが期待されているので、卒業後三年後までの成長を考えながら、すなわち、2年生秋学期の選考プロセスにおいてはその学生の五年後を想像しながら選ぶことを考えてもいいでしょう。つまり、五年後を念頭に伸びていけるような学生を選ぶことです。

もう一つの選考基準は、ゼミ内の「多様性」でしょう。もちろん、ある学問を専門ゼミと一緒に学んでいくので、その学問を中心にした「共通性」が学生の間には存在することになります。しかし、集団行動であるとか学問以外の多くの要素をも学ぶ専門ゼミ活動では、同じような人ばかりいても「広い意味」での学びの程度が小さくなります。性別・出身・国籍などを考慮するのも一つの考え方でしょう。

ティップス4① 選考プロセスが終わって、内定が出たら、早いうちに内定者の懇談会をもちましよう。

学生自身は自分の他に誰が選ばれたのかに強い関心を抱いています。それは、横の強いコミュニティを作ることに関心があるからです。ここで、同期の繋がりを作ってもらうことが大事です。同期の連絡をつくるために携帯電話のメールアドレスを彼らの間で作ってもらうことをお勧めします。担当教員はそのリストの中には入る必要はありません。連絡が必要であれば、ゼミ生の誰かにメールを送って、携帯メールアドレスで回してもらえばよいのです。この携帯メールアドレスは、後々の学生間の連絡網の基礎になります。例えば、ゼミ生だけで教員は巻き込まずにイベントや遊びをするときに使ってくれます。携帯メールアドレスをときどき学生は変更しますが、これも自主的に携帯メールアドレスで更新していきます。

2 ゼミ開始にあたって

もし、内定決定後のあとゼミ開始の前に大学の休みがあれば、何か宿題を出しましょう。但し、学生の状況もわからないので、あまりハードな課題にすると、学生がついてこないかもしれません。学生はどんなに大変な課題も、事前に想定

し、中身に納得していれば、こなします。想定外であれば、忘れたり、やらなかったりする可能性があります。絶対に一人残らず完了させるためには、ゼミ開始の約1〜2週間前に携帯メーリスで、課題はやっておいてねとりマインダーを流してもらおうようにお願いします。

ゼミ初日では、まず、ゼミ長・副ゼミ長という執行部を選びましょう。ゼミ長は連絡役としてもっとも大事です。いろんな選び方がありますが、教員は介在せずに、学生の間で決めさせるのが適当だと思います。男女半々であれば、副ゼミ長は男女一人ずつにしておけばよいと思います。何かの理由でゼミ長がゼミを離れることになった場合には、副ゼミ長が自ずとゼミ長の役割を果たしてくれるでしょう。

Q ゼミ長の他には、いろんなゼミ内の役割を決めてもよいかもしれません。どうやって決めましょうか。

- ① 係を明示してゼミ内で決めさせる
- ② 上位学年のゼミ長と話しあってもらおう

A：②上位学年のゼミ長と話しあってもらおう

ゼミ長がゼミ学生の中で決まっていれば、一般にはこういう担当はスムーズに決まっていけます。どういう担当があるかは、上学年のゼミ長から現学年の新ゼミ長が取材していけばいいのです。教員がなすべきことは、ゼミ長同士が会うように繋げて決めてもらえばいいだけです。

ティップス4② 携帯メールリングリストとは別に、教員が参加したPCメールリングリストをつくりましょう。

PC、すなわちパーソナル・コンピュータでのメールリングリストの無料サービスを利用すればよいのです。これで教員を巻き込んだ情報発信をしていきます。ゼミ生も慣れてくれば、自分たちの中だけの情報共有には携帯メールリスを、教員を巻き込んだ情報共有にはPCメールリスを使うようになっていきます。また、PCメールリングリストのサービスには、しばしばファイル共有や写真共有のサービス

がついていきます。これらは情報共有のツールとしてとても重要です。

PCメールリングリストの代わりにフェイスブックなどの実名SNSを利用することもできます。考えなければならぬことは、学生との距離の取り方です。ミクシーなどの匿名可SNSは、プライバシー度が高くなり、プライバシー度が小さいので、あまりお勧めしません。専門ゼミの根幹はパブリックでもあり、プライベートにも関わるとというのが基本姿勢だと思います。留意すべきことは、教員と学生の関係は友人なのかということ。SNSは一般に友人関係で繋がりをくっつけていきます。

ゼミ生と教員の間で強制的に友人関係をつくる必要はないように思えます。しかし、「ほうれんそう」と呼ばれる「報告・連絡・相談」などの情報共有にデジタル・ツールを利用しないのは非効率です。このため、学年ごとのPCメールリングリストを設定し、フェイスブックについては個人ベースで関係を作るといった一つの折衷した考え方ではないかと思えます。ただし、この点は、インターネット・テクノロジーの進歩を見ながら判断しないといけないのかもしれないかもしれません。

やや蛇足になりますが、私は大学の交換留学の枠組みで海外に出る学生につい

ては、フェイスブックでの友達承認をお願いしています。これは、海外での学生のいろんなリスクに備えて、フェイスブックで情報がとれる可能性が高いからです。例えば、海外留学して、フェイスブックで新しい友人ができていくのは極めて当たり前のプロセスです。それがなかったら、逆に何か交友関係で問題があるのかもしれない。教員が常にそういう点に注意しなければならぬというわけではありませんが、一般に交換留学では帰国後に単位互換プロセスが存在し、指導教員は学生の留学生活についてコメントが求められます。帰国後、事後的に学生にインタビューをすれば、その程度のコメントは簡単に作文できますが、留学中のリスク管理も兼ねて、当事者として、配慮しておいてもよいかもしれません。

最後に、写真付きのゼミ名簿をつくりましょう。趣味や特技や、これまでにやったアルバイトなどを書いてもらいましょう。これは、基礎的な情報共有ですから、自分が知っていることを相手も知っている状況を作り出せばよいことになります。ここで、もし万一、あるゼミ生に趣味が無い、もしくはアルバイトをしたことが無いということがわかったら、折を見て、適当な趣味を作ってもら

ったり、アルバイトをしてもらったり、するよう働きかけましょう。社会人として「他人に言える適当な趣味」をもっているのはごく当り前ですし、アルバイトをしたことが無いのはかなり珍しいことになります。そんなことはアルバイトなことでは紹介する必要はないという主義であれば、そう言いながら、珍しいねとコメントしておけばいいのです。

繰り返しますが、専門ゼミとはパブリックだが、就職活動で尋ねられるくらいにはプライベート領域とも関係をもつというのが基本スタンスだと思います。企業のエントリー・シートには趣味や特技の欄がありますし、面接の中でこれまでのアルバイト歴を尋ねられたりします。その程度には専門ゼミはプライベートをカバーすると考えればよいのだと思います。もちろん、個人として、そんな必要はないというスタンスであっても結構です。要は、パブリックな社会の中で、どの程度までプライベートが関わるのかという程度問題なのです。要は、教員は社会人の一人ですから、社会のなかでどの程度までプライベートなことを公表するものなのかを知っているはずですから。そういう基準で学生と付き合えばいいのです。

3 コメント・ペーパー

Q どんな学問と関わる専門ゼミでも、最終的に卒業論文が到達点にある場合には、最初にチェックしなければならぬことだと思います。要は、本が読めるのか、要約が作れるのか、何かしらの疑問点を見つけれられるのか、それに対して自分の答えを作れるのか、という学問として最低限の振る舞いができるかというチェックです。これも、全員が絶対出来るのであれば、一回チェックするだけで結構です。しかし、一人でもできないのであれば、できるようになるまで多少は時間がかかりますので、早めに処置しておいたほうがいいのです。

では具体的に、コメント・ペーパーとしてどういう課題を出しましょうか。

- ① 一週間に本を一冊読んでペーパーを書いてもらいます
- ② 二週間に本を一冊読んでペーパーを書いてもらいます
- ③ 三週間に本を一冊読んでペーパーを書いてもらいます

A : ②二週間に本を一冊読んでペーパーを書いてもらいます

やることは非常に簡単です。二週間程度で新書を一冊読んでもらい、A4版に前半は要約、後半はコメントを書いてもらうだけです。学生を二グループに分けて、隔週でそれぞれをチェックしていくというわけです。学生がコメントは、感想ではなく「自分の質問+自分の答え+答えのサポート」にしてもらうように強く誘導します。チェックにおいては、要約がどれだけできているか、議論の質はどうかという点でいくらか掘り下げはできますが、どこまでするかは担当教員の考え次第です。答えのサポートはS A F E R (統計 Statistics、エピソード Anecdote、事実 Fact、例 Example、理由づけ Reasoning)ですが、そういう基本的なことを学生が知っているか、そして実践できるかを確認すればよいのです。学生が事前に知らなくても、三回おこなえば、ほぼ全員がその時点ではできるようになります。もちろん、学生は次第に忘れていきます。しかし、「頭の筋肉」を通じた知識はすぐに再生します。そのためにゼミの最初に仕込むのです。

もし学生が一年後に卒業論文に取り組まなければならないとしたら、このよう

な訓練をおこなう必要は更に増します。学生がきちんとしたコメント・ペーパーを一冊の本についてA4×1枚を使って書くことができれば、すぐに2枚版も書けます。A4×30枚程度の卒業論文の「はじめに」に続く「先行文献研究」の章では、だいたい10枚強を書くことが目安です。すなわち、3、4冊の先行文献についてコメント・ペーパーを書き、そのあと、自分なりのまとめを書き、自分の質問・疑問を提出できれば、そのまま先行文献研究にもなります。

ティップス4③ 訂正と返却については、一年基礎ゼミと同様に、できるだけ提出全員分を印刷して、ゼミ生全員で共有することをお勧めします。

そして、一枚ずつ簡単にコメントを加えていければ、学生はすぐに誉められた方向に収束していきます。ゼミ生が多い場合には、ゼミ生を半分に分けて、毎週確認していくことをお勧めします。ここをするかしないかで学生の目に見える変化は違います。なぜなら、単に赤字を入れて添削して返却する場合には、学生は嬉しいと感じますが、自分の行動を直す可能性は低いのです。もう一度書き直す

可能性は低いわけですし、学生が次のコメント・ペーパーで間違いをしたくないという意識を作るにあたっては、他のゼミ生がされたように授業中に指摘されたくないという気持ちが必要になります。

このようなコメント・ペーパー作業をやっているとゼミナール自体の進みは遅くなります。それは仕方がないように思います。ゼミナールが進行しているという雰囲気を出すためには、課題図書を上手に選ぶことが重要です。一年基礎ゼミのように学生が一つの本を全員で読むことにはあまり賛成ではありません。コメント・ペーパーのための読書は、たとえばペーパーを書く上で学生がどんなに時間をかけて読もうと、A4×1枚を書くための読書ですから本質的には厳密な精読ではありません。授業として厳密な精読をする場合にのみ、一冊を全員が読む意味があると思われれます。ですから、教員が示したリストの中から、学生が自分なりに関心をもった本を選び、要約を全員で共有するところから、ゼミ生全体がいろいろな種類の本を読んだ気になることのほうがメリットになります。

ゼミナール自体では、教員の多少の発表の後、ゼミ生の発表に続きます。望むらくは、教員が理論・枠組みを解説して、その応用をゼミ生が発表していくのが

良いと思います。ここで、どんな教材を選ぶかは、本書を読むような人には自明だと思えます。それぞれの学問体系の中で最適な本を選べばよいのです。

夏のゼミ合宿をやる場合には（私は、やったほうがいいと思いますが）、勉強した内容が夏のレポートに反映されて、夏合宿で発表できるようにしなければいけません。ここでどういう課題を選ぶかも、読者には自明のはずです。

4 サブゼミⅡ教える活動

学生の間にも自ずと自主的に勉強会を組織するという気運・伝統が無い場合には、ゼミナール（教員が出講するゼミナールのことを「本ゼミ」と呼びます）の下に、サブゼミを組織することを検討してください。サブゼミとは、学生が自主的にある課題を勉強する作業です。学ぶ課題は本ゼミもしくは学科と結びついていることが理想です。

例えば、ゼミ生の中に英語を勉強したいという気持ちがあれば、英語を勉強してもらいましょう。次の学期の教科書を読むために必要な基本文献を勉強しても

らってもいのです。何にせよ動機・目的がありさえすれば、サブゼミで大事なことは「教え合うという体験」を共有してもらうことにあります。

最近の学生は、極めて高度化された「授業を受ける」消費者になっています。世の中にはあらゆるお稽古ごとが存在し、「消費者として学ぶ」ことができます。そして、六割から八割の完成度をもって通過していく練達の士になることができます。しかし、大学卒業後の社会では、六割から八割ができる受け身姿勢の人では通用しません。一方で、与えられた作業を九割九分九厘から十割の完成度で達成することと、他方で、その作業を教科書なしで他人（後輩・新人）に教えることが要求されています。ここが、大学と社会（会社）のミスマッチの一つの原因だと思われます。つまり、大学には「学び」はあるのですが、「教え」が欠如しています。しかし、社会の要請に応えるためには、「教えられる人」が必要になります。大講義でも試験勉強をグループで行えば、自然と教える作業が入り込みます。しかし、教える経験を直接に提供する制度枠組みがサブゼミです。

サブゼミの運営を担当すれば、時間感覚も出てきます。管理能力も試されます。「ある科目を教えられればその科目を真の意味で理解している」という真理も体

験できます。

具体的に教員側が何を設定するかというと、三点あります。第一に、何を勉強してもらいたいかが明確に示すこと。第二に、学生の履修登録（時間割）が決まる前に、全員が集まる時間を設定し、必要なら教室を予約しておくこと。第三に、サブゼミの進行状況について、折を見て学生から軽くヒアリングを数回おこない、数回は見に行って記録写真を撮ること、です。

ティップス4④ 学生のために、記憶を記録にすることは教員にとって大事です。

5 インターゼミ

本ゼミ・サブゼミと並んでゼミ活動で重要なのはゼミ間の交流です。同じ学部・学科での交流も大事ですが、多様性を導入する上でより効果的なのは他大学との交流になります。この本ゼミ・サブゼミ・インターゼミの三つが揃って、本ゼミでは「自分の活動が評価される」、サブゼミでは「教え合う体験をする」、そして

インターゼミでは「自分を他人にさらす」という重要な三つの参加型の学びが結実します。

これからは他大学とのインターゼミについて簡単に書きますが、いろいろなやりかたがあります。大きな区別は、通常の本ゼミでの学びと関連させるかです。例えば、卒業論文の発表を他の大学ゼミと一緒にこなうというのが一つのパターンです。そうであれば、ゼミナール（本ゼミ）でその事前練習をすることができません。もしくは、インターゼミのコンテスト課題を設定し、その勉強を本ゼミでこなうというように設定することもできます。

逆に、本ゼミとインターゼミは全く別物とすることもできます。この場合には、インターゼミは、一日のイベントになります。学生が自主的に運営することもできますし、教員が設定するイベントにもできますし、そのミックスにすることもできます。

ティップス4⑤ インターゼミのコンパはいろんな出会いがあつて楽しいです。

年に何回行うかについても、各学期に一回することもできますし、一年に一回する設定も可能です。二つの大学で互いに開催し合うことによっては、他の大学を訪れるのも学生にとっては貴重な体験になります。

6 3年夏合宿

Q 夏休みと春休みは学生にとって非常に大事です。自動車免許をとったりアルバイトをしたり、海外旅行をしたりするわけですが、自主活動期間として学生の本領が発揮されます。そういう意味では、目安を与えることが大事かもしれません。貴方は学生にどんな目安を与えたいと思いますか。

- ① できるだけ具体的な目標を自分で決めさせて後に「振り返り」を行う
- ② できるだけ具体的な目標を自分で決めさせる
- ③ 曖昧な基準を提示する

A：③曖昧な基準を提示する

私は「一年の夏休みは『自分に対して私はこれをやったと言える夏休み』にしたほうがいい。二年の夏休みは『自分だけでなく他人に対しても私はこれをやったと言える夏休み』にしたほうがいい。」と提示しています。具体的な目標を決めて教員が主導して「振り返り」を行うのは一年生に留めておきましょう。二年生では「振り返り」を教員が主導しているようでは自主性もあつたものでもありません。三年の夏休みは、大学時代に自分のやったことを完成させる夏休みになります。夏休みでも春休みでも長期休暇の特徴は自由と責任です。教員が介入して「振り返り」をさせる必要は三年生については特にはありません。

ゼミナールについては、大学時代の自分のやったことになりましたから、きちんとした夏合宿をすることをお勧めします。学生が発表する夏合宿であり、その成果がきちんと生産される夏合宿です。たとえば、春学期に勉強した内容を自分で再生産するレポートを執筆して、夏合宿で発表するというのは一つの方法です。コメントを上級生や教員より与えられて、合宿後に修正して一つの文書に仕上げ

れば、ゼミでの成果になります。

夏合宿を盛り上げたければ、春学期の間にゼミTシャツ（もしくはポロ・シャツ）を作りましょう。学生に自由にデザインしてもらえばいいのです。皆さんが同じデザインの服を着て、写真を取ると、後の記念にもなります。ゼミ募集の良い写真にもなります。こんな風に、一石数鳥を考えていくのが大事なので、その意味で、細部に天使も悪魔も宿ると言えるでしょう。

ティップス4⑥ 「細部に天使も悪魔も宿る」ので、新しい要素を専門ゼミに付け加えるときは整合性と一石数鳥になるかを検討しましょう。

7 3年秋学期

3年秋学期で専門ゼミは一つの区切りになります。就職活動が本格化するからです。世の中には3年秋学期も就職活動は本番だというようなことを言う人がいますが、必ずしも真実ではありません。多くの学生は3年秋までに単位を履修し

ますので、就職セミナーや説明会があっても、学生は自ずと大学に3年秋学期にはそれなりにやってくるのです。もちろん、これは就職先と大学が大まかに言っ
て同じ地域にある場合の話です。場所を移動しないと就職先が見つからない、「地
方」の国立大学の学生にとってはやや話が違いかもれません。

ゼミナールの内容はきちんと設定しましょう。春学期よりは学生の発表を多く、
そして、学生の参加をより促進しましょう。例えば、質問をしなければ出席には
しないというぐらいの態度で臨んでもいいかもしれません。それでも新年を明け
ると就職活動ムードが広がってきますので、ゼミは12月で一区切りにするこ
とを考えておいたほうがよいと思います。

サブゼミは、学生の自主的な就職活動の準備にあてればよいと思います。次の
章でより詳しく書きますが、自己PRや学生生活で取り組んだことなどのエッセ
イ執筆には自己分析や他人からの分析（「他己分析」と呼ばれます）がそれなりに
有効です。企業への志望動機を書くためには、業界分析と企業分析が必要になり
ます。これらは、学生たちが一緒に行ったほうが効果的です。

1月になったら、4年の卒論発表を聞いてから、翌週に自分の卒業論文の最初

の発表をするというのが一つのお勧めする案です。卒業論文が必修として課されていない学部・学科でもこういう作業を設定することをお勧めします。なぜなら、就職活動において、面談担当から『卒業論文（研究）はどんなテーマで書くのですか？』という質問が気軽に投げかけられるかもしれないのです。そのためにも多少の準備をしておいたほうがいいわけです。ちなみに、そういう質問をした後に、本当にそのテーマの論文が執筆されたかをチェックする会社があるとは聞いたことがあります。あくまでも面接の中の「気軽」な質問なのです。それでも、学生からすれば多少の準備をしておいたほうがいいわけです。教員はそういう点では学生の就職活動に学問的に貢献できるわけです。

以上、ゼミナールの形式について詳しく細かく書きました。章の冒頭にも書いたように、ここが大学の学びの本丸です。「学び」とは受け身で授業を聞くことではなく、「自分の発表が評価され、教え合い、自分を他人にさらす場がある」ことだという点が伝われば幸いです。

五章 就職活動に対する指導

大学生の就職活動に際しては、助言をする親御さんの就職活動体験を考慮しておく必要があります。ご両親の就職活動経験は1980年代前半のバブル前から、いわゆるバブル期、更に今後はバブル後の『失われた』時期に入ってきています。すなわち、親御さんが大卒であれば、終身雇用制を前提とした四年生春学期の短い就職活動を経験した可能性が高いのです。1996年までは大学と企業間の就職協定が存在しており、これを前提とした比較的短期間の就職活動が行われていました。学生からすると「売り手市場」であって、全員が第一志望の企業に入れたわけではないが、それなりに満足した就職活動が行われていました。

これに対して、現在の大学生の就職活動は3年生秋学期にセミナーや説明会が始まり、年が明けると一部の業種では採用活動が始まり、就職テストが始まります。春休みには本格化し、四月になると大手企業も面接から内々決定まで本格化します。そして、春学期、夏休み、秋学期の秋採用と就職活動は長く続きます。そして、学生からすると、その長い就職活動の結果として、不本意な企業に入る

場合も相当あります。すなわち、これだけ就職活動のやりかたが異なるので、親御さんの学生へのアドバイスがあまり有効でない場合もあります。この点を念頭において、学生の就職活動に対してアドバイスをこなうことが望ましいと思われれます。

次に、大卒労働市場（すなわち就職）の基本構造を把握しておきましょう。一方で、大手と呼ばれる大企業の採用活動があります。これは、製造業や金融業の大企業を指しており、どんな大学生でも名前を知っている会社です。潰れなさそうに永遠に続く安定したイメージがあります（これはイメージです。例えば、三洋電機はパナソニックに買収されてしまいました）。田中（2009）によれば、大手企業からは約二万人の求人があります。田中（2009）はこの二万人の求人に対して、旧帝国大学と、有名私立大学の上位学部の学生による「就職コア層」二万人がいるとまとめています。田中（2009）は、従来の多くの就活本はこの「就職コア層」を対象に書かれています。いわゆる就職テスト本を除けば、私も基本的には同感です。

リクルート・ワークス研究所が毎年まとめている『ワークス大卒求人倍率調査』

によれば、2012年卒業予定の大学生の求職人数は45万人程度です。そして、企業の求人数は55万人程度になります。従業員千人以上企業に対しての求職数は23万人、求人数は15万人。これに対して、従業員千人未満企業に対しての求職数は21万人、求人数40万人ということになります。すなわち、椅子取りゲームに例えれば、大卒を予定している求職者の人数を上回る椅子は存在していません。では、結局のところどれだけの数の学生が椅子に座ったのでしょうか。文部科学省の「学校基本調査」によれば、平成23年度卒業の大学生で、卒業したのは55万3千人、就職が決まったのは34万人ということです。進路未定者のうち就職も進学もしなかった人は8万8千人。1万9千人はアルバイトなど一時的な職業に就き、大学院などには7万人が進学したということです。つまり、55万個の椅子のうち、座ったのは34万個、残り21万個は空のまま撤収された、しかし、椅子に座れないで立っている人が9万人弱いるということになります。混雑し長く続いた結果、これだけ大きいミスマッチが起きているのが大卒労働市場ということになります。

なぜ現在の就職活動はこんなに長いのに、これだけ多くのミスマッチが起きる

のか、これは混雑のためと考えられています。一方で、企業側の「厳選採用」と言われる姿勢があります。つまり、求人数を埋めるような採用活動ではなく、ある基準をクリアした学生だけ求人数内で採用するという姿勢です。また、求人数を満たすことができないまま採用活動を終わらせる場合もあるでしょう。他方で、学生側の「納得」の問題があります。納得しない企業には行きたくないの、行かないという姿勢です。二つの理由とも、もつともな理由であり、それ自体を批判しても仕方ありません。

教員にとって大事なことは、現在と異なる就職環境を経た親御さんに囲まれた学生の「納得」の中で、学生自身が企業に挑戦していく環境を作っていくことでしょう。

1 キャリアのホップ・ステップ・ジャンプ仮説

学生の事前の「納得」は、太宗としては終身雇用制の元で採用された親御さんの経験に裏打ちされています。そういう親御さんの負担で大学に通っている学生

が大半のはずです。そこで、もう少しキャリアの中身を考えておきましょう。

私はキャリアについて「ホップ・ステップ・ジャンプ」仮説を想定しています。キャリアで最終的に大事なものは「形成」ではなく「発現」です。それがだいたい35歳からのジャンプ期です。ここで大事なものは、先頭に立って毎日ジャンプを30年間続けるという態勢ができていくことが大事です。つまり、35歳頃にこれから30年間毎日ジャンプを続けられるような態勢を作ることが「キャリア形成」ということになります。これが大学卒時点の22歳から35歳までになすべきことになります。私は、就職活動を始める21歳頃から25歳まではホップ期として、25歳頃から35歳頃までをステップ期と呼んでいます。30年間毎日ジャンプをする態勢とは、自らの位置する業種と産業、企業組織を十分よく知って働きながら自ずと学びかつ教える態勢です。これを練習し仕上げる期間が10年間ほど必要なので、ステップ期になります。この時期にキャリア・チェンジと呼ばれる業種変更も可能になります。転職には、同一業種内での転職もあれば、業種変更を伴うキャリア・チェンジのある転職もあります。いわゆるMBAなどの職業大学院に行くのもこのステップ期になります。

最後にホップ期です。この時期は就職活動してから、卒業後に「正社員として働く」というサイクルを約三年間経験する時期です。「石の上にも三年」を実行する時期でもありませんし、この時期に自分の人生の方向付けを大きく変えても何の問題もありません。最近はやや死語となりつつありますが、「第二新卒」という言葉の前提にあるのはこういう「ホップ期」の状況です。

この「ホップ・ステップ・ジャンプ仮説」は終身雇用制と矛盾しません。同じ企業の中で社員はホップ期、ステップ期、ジャンプ期を体験して行くのです。これは大会社でも中小企業でもそれほど変わりません。学生の親御さんもホップ・ステップ・ジャンプを経験しているはずなのです。

このように考えると、「就職活動が終わると、会社と仕事が決まる」という見方が短絡的であることがわかります。就職活動が終わっても、ホップ期の挑戦を一つ通過しただけに他なりませんから、さほど一つ通過したというぐらいの安心しかできません。また、就職活動で事前の志望企業と離れた企業になったという意味で、「納得しにくい」結果になったとしても、その後の自分の心の持ちようという訓練の仕方では、ホップ期からステップ期に数回キャリア・チェンジの機会があるの

です。

但し、学生にこういうことを説教する場合には、それなりに時間がかかりますし、タイミングを測って一対一で話す必要もあります。もし必要なければ、話す必要はありません。多くの学生は、大学内に設置された就職関係のセンター主催の講演を聞きながらプロ講師によって設定されたスケジュールと就職観に誘導されながら就職活動を進めていきます。そうでなくても、世の中の就活本に誘導されながら、就職活動を進めていきます。それがうまく行っている間は、竿をさす必要はありません。教員は就職活動において、プロではなくアマチュアなのです。プロではないので、フルタイムで学生の就職活動をサポートする必要はありません。

2 就活三種の神器

教員は学生の就職活動についてはアマチュアです。しかし、そのことは学生が就職活動に臨む際の準備に協力しないということではありません。逆に、大学生

活が自ずと就職活動の準備になるように配慮することはとても大事です。

学生が就職活動に臨む際に準備をしなければならぬものにエントリー・シートと呼ばれる文書があります。ここには企業が指定する質問の答えを書きこまなければならぬのですが、大きく三つの要素があります。第一に、「自己PR」と呼ばれる自己紹介の部分です。第二に、「学生生活で取り組んだこと」と呼ばれる自分の活動紹介です。第三には、その会社への「志望動機」です。これらが資料となって面接で会話が進められることとなります。ですから、良い資料を提出しておくことが大事です。

この三つのなかで、もつとも教員が関われるのは「学生生活で取り組んだこと」です。前章で書いたような専門ゼミナールでの活動が「学生生活で取り組んだこと」の一つになるようにしておく必要があります。企業の採用面接では複数の「学生生活で取り組んだこと」を尋ねることが多いので、アルバイト、サークル、学業と複数用意しておくことが大事です。

次に、企業の「志望動機」です。学生が書いてきたものを読んで、その企業が位置する業界の根本を押さえているか、その業界の中で当該企業が發揮している

強みを押さえているか、その強みをさらに伸ばす点もしくは当該企業の弱みを補強するという点から、志望学生の能力と意欲が書かれているかということが重要です。

最後に、「自己PR」です。学生が書いてきた「自己PR」と教員が認識する当該学生の良さに整合性が無い場合には、教員が認識する学生の良さをテーマとして別案を考えてもらうことも検討しましょう。

学生は、前述したプロ講師および就活本によつて、「自己PR」や「学生生活で取り組んだこと」の作成については「自己分析」をおこなつて準備し、「志望動機」の作成については「業界分析」を行つて準備するということを知っています。これも自ずとうまく行っていれば介入する必要はありません。大学設置の就職関係のセンターにチェックしてもらうように促せばよいのです。但し、しっかりとした三種の神器の作成には試行錯誤で数カ月かかりますので、そういうスケジュールを学生に示しておくことは大事です。

この他に、就職活動の準備で大事なことに、就職テスト対策があります。これは専門の良書がありますので、学生にそれらを使ってよく勉強してもらうように

勧める必要があります。これらの準備に3年秋学期のサブゼミが利用できる、好都合です。

さて、内々定が出たとします。その時に、こういう会社に行ってよいだろうかと学生から質問されたとします。いわゆるブラック会社は排除すべきですが、そうでないとしたら、学生にこういう逆質問をしておくことが大事です。『就職活動で出会った社員とふだん昼食をとれますか。』もし、一緒に昼食を取りたくないよ、うな人々だと学生が思っていたら、再考を勧めたほうがいいでしょう。例えば、大学入学の面接で学生は教員と面接をしますが、教員と昼ごはんを食べる機会は少ないはずです。しかし、企業の面接で会う社員と直接ではなくても、会社に入れば社員との昼食をする機会は多いはずです。一緒に昼飯を食べたくない人と一緒に働けるでしょうか。そういう点に会社の社風も出ますし、学生の協調性と適応力も現れます。

3 プロフェッショナルとアマチュア

先ほど書いたように、大学には就職資料室であるとか、キャリア形成支援センターや就職支援室というような就職関係のセンターが存在して、常駐の職員や嘱託をおいて学生の就職活動を支援しています。そして、これらのセンターはプロの外部講師を雇って、講演会を定期的を開催しています。プロの外部講師は学生を引き付ける話をしながら、上手に学生のスケジュール管理をしてくれます。

彼らはプロで、教員はアマチュアですから、外部講師の言うことには敬意を払うことが大切です。但し、外部講師に必然的なバイアスを考慮しておいたほうがいいでしょう。それは、原則として、大講義の参加者の八割ができるようなことしか言わないということ。例えば、二割しかできないことでは、参加者の八割は失望します。そういうことはなかなかプロの講師には言えないということになります。つまり、それは実際の就職活動では必要条件だが十分条件ではないということになるかもしれません。もちろん、外部講師たちも自分のホームページや電子メールを公開して、より詳しいアドバイスができる体制を作っています。しかし、学生の能力を推量して、参加学生の八割ができることを話すというインセンティブがあることは頭の隅においておいてもよいことです。

4 就職活動支援のスケジュール

3年春学期には、就職活動を気にする学生は業者主催のセミナーなどに行くとがあります。それは学生が情報を取ることですから良いことです。しかし、学生があまりに情報獲得にだけ関心をもって、結局、自分が学生生活で取り組んだことをつくれなくなれば残念です。学生生活でもっとも取り組んだこととしないテーマは就職活動です。学生から教員が相談を受けたら、前節でふれた三種の神器をつくる材料があるかを本人に確認してもらいましょう。

また、学生はエントリー・シートに書く資格のことを心配するかもしれませんが、自分が会社側の面接担当をするつもりになれば、すぐ気がつくことですが、非常に難しい資格、例えば、弁護士資格や公認会計士、中小企業診断士でなければ、その資格そのもので大きく当該学生の就職活動が前進するわけではありません。但し、もし「頑張る学生」なら何かもっていったっていいだろうというぐらいことです。困った学生がいれば、漢字検定準一級をとることを進めましょう。若い人

が漢字を知らないことを中高年の人々は実感しています。

これに対して、よほど事前の英語の成績が良いのであれば、TOEICの成績を上げることが目標にするのは効率が悪いと思われる。もちろん、テストを受けて自分の実力を確認しておくことは大切ですが、外国語の成績を短期間で上げることはなかなか大変です。

3年夏休みには、多くの企業がインターンシップを開催します。採用されるのは大変なのですが、受けることを学生に勧めましょう。長めのインターンシップではきちんとしたエントリー・シートを書くことが求められます。エントリー・シートを書くこと自体が、就職活動の準備になるからです。この他、教員は、自分が学生の間に取りくんだことを、それなりに完成させるような夏休みになるように促してあげることが大切です。

秋学期になると、企業のセミナーや説明会が始まります。この時点では、経済にどんな業種があるのか知らない学生がいますので、合同セミナーや就職フォーラムなどに行くことを勧めましょう。大事なことは、いろんな業種があつて、いろんな会社があつて、知らない会社がたくさんあるということです。

秋には就職テストの勉強をすることも大事です。就職テストは、英語と公務員試験を除くと、中学入試のレベルと似ています。専門ゼミナールでサブゼミが機能していれば、サブゼミを使って就職テストの準備を自分たちでやることをお勧めします。グループ・ワークの練習もしておくといことはありません。

この時期に学生がなすべきことは、OB・OG訪問です。就職活動が大事なものは、働くことが大事だからだという意識を持つためには、実際に働いている先輩に会うことが一番です。また、訪問のコンタクトを取ること自体が、社会人としての礼儀などを実地に身につける一歩になります。OB・OG訪問を望んでおかない、上手にこなせる学生は、就職活動でも安定感があります。

冬になってくると、採用活動を早くから始めている業種・企業では面接が始まることもあります。ウェブ・エントリー、説明会、エントリー・シート、就職テスト、グループ・ワーク、複数回の面接というのが一般的な就職活動のパターンですが、説明会において手書きでエントリー・シートを書かせる会社もありますし、最初の面接をしてから就職テストになる会社もあります。それぞれの学生は、就職活動のどの部分が苦手かは千差万別です。自分がどの部分か苦手かがわ

かかっていれば、かなり対策を準備できるのが普通です。

グループ・ワークでは、その会社の社風に合った評価をしていることが多いと思われます。ある会社では丁寧さ、別の会社では協調性、別の会社では指導力を見ていたりします。つまり、ある一つのやりかたで上手く行くとはいえないということでしょう。社風や企業の特徴をつかむということが大事です。

面接については、学生が面接を質問と答えの応酬と考えていることがあります。質問に対して正しい答えをすることが面接を通過する方法だと考えがちです。こういう学生が面接に苦しんでいる場合には、面接とは質問と答えの応酬ではなく、「相手が話題を決める会話」だということを話してあげましょう。きちんと会話をしてることが面接では大事です。但し、通常の会話と違って、話題の選択権が採用側にあるということが特徴です。それでも、志望者側にも話題を選択できる機会が存在します。それが、採用側から尋ねられる「何か質問はありませんか。」という機会です。このとき初めて話題を選択することができるのですから、学生にはそういうつもりで質問（＝話題）を選んでいくようにアドバイスしてあげてください。

冬から春になると、内々定を学生が会社から頂くようになります。この時に、どの会社を選んだらよいかと相談される場合もあります。いろんなアドバイスが可能です。仕事の内容、企業の安定性や将来性もありますが、ホップ期の重要な点として、前節でふれた社風が大切です。新人は仕事を教わらなければなりません。これは、研修であつてもオン・ザ・ジョブ・トレーニングであつても、同じです。ということは、先輩との交流が大事ですから、面接などで会う社員が「一緒に昼ごはんをしてもよい人か」どうかを学生自身にチェックしてもらってください。どんなに名前がよくても社風が合わなければ、ホップ期としてはまずい選択かもしれません。

学生は、ウェツプ・エントリーを通算で百社ぐらいおこなつて、就職活動を始めていきます。それでも、春頃に自分の手持ちがなくなつた時に慌てる学生もいます。そういうときのアドバイスとして、いわゆるウェツプに載らない会社を探すように勧めることを検討してください。会社が求人票を大学に送ってくる場合があります。会社側からすれば、ナビと呼ばれるウェツプ・サービスを使う場合には多額の経費がかかりますが、大学の就職担当に求人票を送るのであれば、書

き込む手間と郵便代しかかかりません。そして、会社側からすれば、大学を選んで送ることもできるのです。

学生の就職活動は、学生がこれまで経験してきた成績を通じた縦の闘いではなく、知能だけでなく愛嬌まで評価される全般的な幅広い横の闘いになりますので、いろんな所に落とし穴があります。学生が自分で落とし穴に気がついて、回避したり這い上がったりできればいいのですが、そうならない場合もあります。学生との面談を通じて、なんとか学生自身が自分で気がつくように促すことができたらいと思います。大学教員としては、卒業までのじっくり支援を念頭において、あくまでも学生自身が運転席に座って進めるようにアドバイスをしていくことが大切でしょう。最後に、学生が長い就職活動の中で心の病を患うこともあります。そういうシグナルを認めたら、大学に付設されている学生相談室に学生と同道して、カウンセラーと学生を引き合わせる勇気をもってください。

学生は就職活動が終わると、それなりに社会人のような顔になってきます。見知らぬ会社で自分を制御しながらさらけ出すという活動が、学生を伸ばしていくのだと思います。教員にとって、就職活動は学業を遮るマイナス要因ではなく、

学生が社会人に成長していくプラス要因となっていくようにアマチュアとして側面支援をしていくことが望ましいと思います。

第六章 卒業論文

卒業論文が必修になっていない学部・学科もたくさんあります。必修になっている学部・学科もあります。現在のように学生の就職活動が3年の秋冬から4年生の春にかけて長く続く場合には、就職活動が終わった後に、学生を大学での学問に繋ぎ止める錨として必修の卒業論文は有効です。特に文系の大学では、文章によって一定の分析ができるということは学生の品質保証になります。卒業論文が必修で存在しないために、3年春学期までは結束してきたゼミナールが夏休み頃から名実ともに崩壊してしまうということも仄聞したこともあります。また、必修化されていない学部において、専門ゼミナールの選択で、このゼミは卒業論文を書くことを条件とするようなゼミがあるということも伺ったことがあります。

1 なぜ卒業論文を書くのか

学生は常に動機付け（モチベーション）が大事です。学生の行動において動

機付けの役割については、教員は自分の把握が過小評価になっていないかチェックしたほうがいいかもしれません。卒業論文がたとえ必修化されていても、かなり長い文章を書くことに対しての動機付けはしっかりしておいたほうがいいでしょう。たとえば、大学院でも行かない限りは、多くの学生にとって、使った教科書は売るかあげるか捨て、ノートはあげるか捨てるというのが選択肢です。とすると、大学を卒業する際に、見えて残る記録は成績表と卒業証書だけです。これに卒業論文を加えれば、自分の勉強が記憶ではなく、記録に残ることになります。そういう未来をイメージしてもらいましょう。

付け加えて、卒業論文は『『五年後の自分』へのプレゼンター』と形容することもできます。例えば、就職はしたが、その後に自分が大学院に行きたくなったりする。その時に頼りになるのは自分の卒業論文だというわけです。長い分析が書けることを証明する唯一の文書になります。

そうは言っても、実際にイメージがなければ始めることもできません。この時に都合がよいのは、上位学年の卒業論文発表会を見せることです。発表会の順位付けをお願いするのも一つの手です。何が良い卒業論文なのかを評価シートに明

確に出して、これを使って上位学年の卒業論文を評価してもらえば、何が良い卒業論文なのかということは、その時点では明確に把握します。

例えば、1月上旬に卒業論文の発表会を開催し、その後に3年生の第一回の卒業論文のテーマ発表をおこないます。テーマ選択にあたっては、一年間取り組めるテーマを選んでもらうことが大事でしょう。執筆動機、分析手法、予想される結果などをレジュメにして簡単に発表してもらうとよいと思います。この発表を1月時点でおこなっておくことのメリットは、春休みを控えて、卒業論文というイメージをもってもらうこともありますし、時たま就職活動の面接において卒業論文のテーマを尋ねる面接担当がいるからです。そういうことを事前に学生に言うっておけば、学生のほうも冬休みにそれなりに考えて自分のテーマを持ってくることになります。

2 構成

4年生の四月になると、もう一度、卒業論文のテーマ発表をしてもらうことを

お勧めします。そうすると学生にも教員にもチェックになります。私の経験では、この時点で3分の1から半分ぐらいの学生がテーマを変えていることも普通です。テーマを変更するのは、学生側がより真摯に卒業論文と向き合っている態度だと考えてよろしいかと思えます。

テーマ発表の構成ですが、執筆動機、分析手法、予想される結果に加えて、参考文献リストを提出してもらうことが大事です。1月の第一回のテーマ発表の時点で、参考文献リストを4月には出してもらうように言っておくと、物事はスムーズに進みます。

この参考文献リストから、先行文献研究として読む本を選んでもらって、レジュメ（A3 || A4 × 2枚）を作って数回発表してもらおうというのが春学期の課題になります。そして、最後の発表で先行文献のまとめを行い、それをふまえた自分の質問を出せば、春学期は終わりです。だいたい、10枚以上の先行文献研究を書いて提出してもらえれば、問題ありません。

夏休みには、この質問を解く作業を始めてもらうということになります。大事なことは分析手法に意識的になることです。なぜ、この質問を解くのに、この分

析手法が必要なのかということを意識することが卒業論文としては重要です。この部分は研究方法として、書いてもらおうとよいでしょう。

秋学期になると自分の質問に自分が決めた研究方法で取り組み、その結果を研究結果として書いていくこととなります。教員がなすべきことはペース・メーカーとして数週間に一回、定期的に会合を行っていくことです。この時、数人を一緒にしておく、学生は同級生の発表から学んでいきます。

研究結果ができたなら、これまでに書いた先行文献研究を第2章、研究方法を第3章、研究結果を第4章にして、要約と今後の課題を結論（第5章）として書いてもらいます。そして、最後に論文の執筆動機を「はじめに」（第1章）として書いてもらい、参考文献を最後につけてもらえれば、30枚程度の卒業論文ができあがります。最後に、学部・学科の卒業論文の形式に合致しているかを学生にチェックしてもらえれば、終わりです。

3 発表、そして卒業

卒業論文を提出したら、発表してもらいましょう。先に書いたように卒業論文に臨む3年生にも参加してもらって、発表会を開催すると、お客さんも多くなります、発表する4年生の意識も高まります。3・4年生で投票して、学生が選んだ最終論文賞などを出してもいいかもしれません。

卒業論文が終わって、単位が揃っていけば、いよいよ卒業になります。卒業式や卒業パーティーではゼミ生などと楽しく懇談することになります。

七章 オムニバス講義・模擬講義

ここでは、オムニバス講義や高校での模擬講義に臨む心構えについて書きます。オムニバス講義は、教養系・総合系の学部・学科においてその学科の特徴を学生に知ってもらうために必修で開講されることがあります。つまり、出番は一回から数回です。そして、学生は必修で履修しているために、履修意欲はあまり高くありません。こういう場合は、いわゆる研究セミナーと同じぐらいの完成度で授業準備をすることが大切です。一回が勝負です。もちろん、レベルは研究レベルではなく、教育レベルですが、その一回が勝負です。たとえば、非常に複雑な踊りをスローモーションで踊るようなものだと思ってもいいかもしれません。高校や大学のオープン・キャンパスでの模擬講義もオムニバス講義と似ています。その一回一回が大事なので、失敗してはいけません。コンピュータでのプレゼンテーションや、プロジェクターとスクリーンを使う場合には、機材の準備に万全を期すことが重要です。言わば、一期一会のつもりで取り組むことが大切だと思います。高校での模擬講義は、それぞれの高校の雰囲気を知ることができる

ので、一年に一回ぐらいされることをお勧めします。高校の多様性は、非常に大
きいというのが実感です。

参考文献

【日本語文献】

- 奥井真紀子Ⅱ木全晃『ヒットの法則』（日経ビジネス人文庫、2006年）『ヒットの法則2』（日経ビジネス人文庫、2009年）
- 立花隆他『二十歳のころ（1）（2）』（新潮文庫、2001年）
- 田中秀臣『偏差値40から良い会社に入る方法』（東洋経済新報社、2009年）
- 中井俊樹編『大学教員のための教室英語表現300』（2008、アルク）
- Ⅸ・ニール・ブラウンⅡスチュアート・Ⅸ・キーリー『クリティカル・シンキング練習帳』（2004、PHP研究所）
- 吉見 俊哉『大学とは何か』（岩波新書、2011年）

【英語文献】

- Robert M. Brinton, Marguerite Ann Snow, and Marjorie Wesche, 1989, *Content-Based Second Language Instruction*, Michigan Univ. Press.

Robert Chambers, 2002, *Participatory Workshops: A Sourcebook of 21 Sets of Ideas and Activities*, EarthScan.

John Newstrom, and Edward Schannell, 1996, *The Big Book of Business Games*, McGraw-Hill.

おわりに

この本に書いていないことは、1年秋学期から2年までのゼミナールについてです。この間はクリティカル・シンキングと呼ばれる自らと他人の議論の形式をチェックする重要な思考を身につける期間です。情報リテラシーの側面から言うと、MSエクセルなどの表計算ソフトに熟達すべき時期でもあります。しかし、2年秋学期を除いて、私は担当したことがないので、自制して書きませんでした。いつか、この時期をきっちり担当して、この分を加えようと思います。

自分が授業をつくりながら、参考として念頭に置いていたのは、多くの自分が受けた授業でした。その良さを残しながら、使えないところをどう置き換えるのかということを考えてきました。そして、基準としては、唯一「自分が受けた授業」であるかということ念頭においてきました。反面教師という意味を含めて、本書に書いたどの記述が、どんな意味でも皆さんの参考になれば幸いです。

最後に、コメントと激励を頂いた中村雄祐、服部哲也さんに感謝します。

久松佳彰

東洋大学国際地域学部教員.

hisamatsu@toyo.jp

大学授業の型

電子新書 1

2011年10月1日

著者 ひさまつよしあき
久松佳彰

発行者 久松佳彰

発行所 久松佳彰

印刷・製本 なし

© Yoshiaki Hisamatsu 2011